合志市文化財調査報告第３集

船入遺跡

社会福祉施設百合ケ丘保育園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2018 年

合志市教育委員会

船入遺跡遠景（国道３号熊本北バイパス建設前）

合志市文化財調査報告第３集

船入遺跡

社会福祉施設百合ケ丘保育園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

船入遺跡全景

2018 年

合志市教育委員会

序　　文

合志市教育委員会では、社会福祉施設百合ケ丘保育園建設事業に伴い委託を受けて本市大字須屋に所在する船入遺跡の発掘調査を実施しました。

船入遺跡はかつて国道3号熊本北バイパス建設工事に伴い、熊本県教育委員会による2次にわたる発掘調査が実施された「船入遺跡Ⅰ・Ⅱ」に隣接する遺跡であります。同じく、市道を挟み北側には旧西合志町及び本市教育委員会が10年にわたり発掘調査を実施し、平成25年3月に「須屋城跡」として発掘調査報告書を刊行したところであります。

今回の発掘調査により、また新たに中世から近世期を中心とする遺構や遺物が出土しました。これらをまとめて報告書を刊行することになりましたが、この時期の遺跡構造を追及する新たな歴史資料として活用され、さらなる学術研究の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査は社会福祉施設百合ケ丘保育園の文化財保護に対する全面的なご協力をいただきました。また、地元関係者の皆様、熊本県教育庁文化課や諸先生方に御指導や御協力をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

平成30年3月31日

合志市教育長　惠　濃　裕　司

例　言

1. 本書は、合志市教育委員会が社会福祉法人百合ケ丘保育園の委託を受けて実施した。熊本県合志市須屋に所在する船入遺跡についての埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成 28 年 10 月 31 日から 12 月 19 日までの期間、合志市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に伴う遺構実測、写真撮影等は、調査担当の江本直（合志市臨時職員）が主に行った。
4. 調査区の 4 級基準点測量、メッシュ杭の設置、地形測量、遺構実測は、株式会社有明測量開発社に委託した。
5. 整理作業、遺構・遺物の実測、製図は株式会社有明測量開発社に委託し、平成 29 年 2 月 1 日から 3 月 31 日まで行った。
6. 本書の執筆は、本調査については米村大（合志市教育委員会）、江本、島浦健生（株式会社有明測量開発社）、横田光智（株式会社有明測量開発社）が、確認調査については阿南亨（菊池市教育委員会生涯学習課係長）が分担して行い、米村が編集を行った。
7. 本書の割付・版下作成は、株式会社有明測量開発社に委託し、平成 29 年 10 月 10 日から平成 30 年 2 月 28 日まで行った。
8. 文書の校正は、米村、江本が行った。

凡　例

1. 現地での実測図は、以下の縮尺で行い本書収録の際には以下の縮尺で作成した。

遺構配置図		現地 50 分の 1	本書 700 分の 1　300 分の 1
遺構実測図	土坑	現地 10 分の 1	本書 40 分の 1・60 分の 1
	集石遺構	現地 10 分の 1・20 分の 1	本書 40 分の 1
	溝跡	現地 20 分の 1	本書 60 分の 1・80 分の 1
	土層断面図	現地 20 分の 1	本書 60 分の 1・80 分の 1

2. 本書における遺物の縮尺は土器 3 分の 1、石器 3 分の 1、鉄製品が 3 分の 1、石造品 5 分の 1 で掲載する。

本文目次

序文
例言　凡例
第Ⅰ章　調査の概要
第１節　調査の契機……1
第２節　調査の経過……1
第３節　調査の組織……2
第Ⅱ章　遺跡の環境
第１節　遺跡の位置と環境……3
第Ⅲ章　調査とその成果
第１節　遺跡の概要……9
第２節　遺跡の層位……9
第３節　遺構……14
1　遺構の出土状況
2　土坑
3　集石遺構
4　溝遺構
5　ピット群
6　その他
第４節　遺物……25
第Ⅳ章　まとめ……39
船入遺跡確認調査……61
報告書抄録

挿図目次

第 1 図　船入遺跡周辺遺跡分布図……6
第 2 図　周辺地形図……10
第 3 図　須屋城跡略測図……11
第 4 図　確認調査及び船入遺跡（県教委調査区）Ⅰ～Ⅲ区遺構配置図……12
第 5 図　船入遺跡遺構配置図……13
第 6 図　土坑実測図 (1)……16
第 7 図　土坑実測図 (2)……17
第 8 図　土坑実測図 (3)……18
第 9 図　SD01 実測図 (1)……19
第 10 図　SD01 実測図 (2)……20
第 11 図　SD02 実測図……21
第 12 図　集石遺構 A 実測図……22
第 13 図　SD03・04 実測図……23
第 14 図　SD05 実測図……24
第 15 図　土坑内出土遺物実測図 (1)……30
第 16 図　土坑内出土遺物実測図 (2)……31
第 17 図　土坑内出土遺物実測図 (3)……32
第 18 図　溝内出土遺物実測図 (1)……32
第 19 図　溝内出土遺物実測図 (2)……33
第 20 図　ピット群出土遺物実測図……33
第 21 図　遺構外出土遺物実測図 (1)……34
第 22 図　遺構外出土遺物実測図 (2)……35

表目次

第 1 表　船入遺跡周辺遺跡一覧表……7
第 2 表　出土土器観察表……36
第 3 表　出土陶磁器観察表……37
第 4 表　出土鉄製品観察表……38
第 5 表　出土石製品・石造品観察表……38

図版目次

図版 1　発掘調査前状況（南側から）……43
発掘調査状況（熊本北バイパスから）
図版 2　調査区中央部調査状況（南側から）……44
調査区中央部調査状況（南側から）
図版 3　SD01 検出状況……45
P-1 鉄器、土器出土状況
青磁底部出土状況
図版 4　SD02 及び南側断面……46
SD05 検出状況（北側から）
図版 5　集石遺構 A 出土状況……47
集石遺構 B 出土状況
図版 6　SD02 集石遺構完掘（南側から）……48
SK01 ～ 10 調査状況（南側から）
図版 7　SK01・02 完掘（東側から）……49
SK04・05 完掘（東側から）
図版 8　SK01 ～ 03 完掘（西側から）……50
SK04・05 完掘（西側から）
図版 9　SK07・08（東側から）……51
SK07・08（南側から）
図版 10　SK08 鉄器出土状況……52
SK10 完掘（東側から）
図版 11　SK10（西側から）……53
SK10（北側から）
図版 12　発掘調査指導、検討会……54
作業風景
図版 13　土坑内出土遺物 (1)……55
図版 14　土坑内出土遺物 (2)……56
溝内出土遺物 (1)
図版 15　溝内出土遺物 (2)……57
図版 16　ピット群出土遺物……58
遺構外出土遺物 (1)
図版 17　遺構外出土遺物 (2)……59
図版 18　遺構外出土遺物 (3)……60

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の契機

平成28年7月19日付けで社会福祉法人白百合福祉会より新園舎建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が市教育委員会に提出された。当時、本市では埋蔵文化財専門職員が不在であったため、菊池市教育長へ菊池市教育委員会の埋蔵文化財専門職員の派遣を依頼し、予備調査を平成28年8月19～23日にかけて実施した。

確認調査の結果、中近世の遺物や溝状遺構が検出されたことから、平成13年に熊本県が行った発掘調査において判明した中世の居館跡の可能性が高いことが想定された。熊本県教育庁文化課と市教育委員会と設計業者の間で協議を行ったが、設計変更はできず、本調査の方向となった。文化財保護法第93条第1項の規定により平成28年9月16日付けで合生第439-1号にて熊本県教育長に通知がなされ、工事着手前に発掘調査の実施が必要である旨、平成28年9月26日付け教文第1291号にて通知を受けた。

しかし、埋蔵文化財専門職員が不在であったため本調査を実施できない状況であり、熊本県教育庁文化課と協議を重ね、調査員に同課OBの江本氏を迎え、調査体制を整えた。

平成28年10月14日付け合生第709号で熊本県教育長あてに文化財保護法第99条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出し、また平成28年10月14日に事業主との委託契約を取り交わし、平成28年10月31日から12月19日までの間、発掘調査を実施した。

その発掘調査面積は800㎡である。整理作業は、平成28年12月21日から平成30年2月28日まで実施した。

第2節　調査の経過

10月31日　コンテナ・トイレ搬入、調査器材搬入、重機搬入
11月1日　北側より表土除去開始
11月2日　環境整備（作業員10名）
11月7日　遺構検出
11月9日　遺構検出状況写真
11月8日　4級基準点測量（有明測量開発社）
11月10日　表土除去終了
11月11日　トレンチ掘削
11月15日　遺構掘削（SK01～05）
11月16日　遺構掘削（SK06）
11月18日　遺構検出（Ⅳb・cグリッド）
11月24日　SD01・02検出
11月25日　SK11・12五輪塔部材、集石出土
11月28日　表土除去（Ⅱa・b・d・eグリッド）
11月29日　表土除去（Ⅱ・Ⅲe区、Ⅲa・bグリッド）
11月30日　調査指導（長谷部係長、須藤文化財保護主事、阿南係長）、SK10焼土、炭化物出土
12月1日　遺構実測（有明測量開発社）

12月2日　浄行寺住職　供養
柱穴掘削（Ⅱ・Ⅲd区、Ⅱb・cグリッド）
12月5日　柱穴掘削（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲb・cグリッド）
12月6日　遺構実測（有明測量開発社）、SK11石材取り上げ、SD05掘削
12月7日　柱穴掘削（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳグリッド）、SD02掘削
12月8日　遺構実測（有明測量開発社）、SD03～05掘削、調査区全景写真撮影
12月9日　遺構実測（有明測量開発社）、SK03・04掘削
12月12日　器材撤収、埋戻し作業開始
12月19日　埋戻し作業完了
12月21日　写真整理

第3節　調査の組織

発掘調査（平成28年度）
調査主体　合志市教育委員会
調査責任者　惠濃　裕司（教育長）
岐部　則夫（生涯学習課長）
塚本　健洋（同課班長）
菅　真一郎（同課主幹）
斉藤　明子（同課主幹）
石田　祐介（同課主事）
奈須　和貴（同課文化財調査員）
調査担当者　確認調査　阿南　亨（菊池市教育委員会生涯学習課係長）
本調査　江本　直（合志市教育委員会生涯学習課臨時職員）
調査指導・助言　村崎　孝宏（熊本県教育庁文化課　課長補佐）、長谷部　善一（熊本県教育庁文化課第1係長）、岡本 真也（熊本県教育庁文化課第2係長）、須藤 美代（熊本県教育庁文化課第1係文化財保護主事）、阿南　亨（菊池市教育委員会生涯学習課係長）、角田 賢治（西合志南小学校教頭）
調査協力者　地元の方々
発掘作業員　大隅 清成、岡元 美子、清田 由美子、後藤 光子、小濱 武子、白石 美智子、
杉内 勝利、中嶋 守、二階堂 千里、森 昭彦、守井 昭雄、森田 幸雄、福田 勝久、
福嶌 雅美、藤永 一也、東 とし子、築地 孝子　（五十音順）

整理報告書作成（平成29年度）
調査主体　合志市教育委員会
調査責任者　惠濃　裕司（教育長）
北里　利朗（生涯学習課長）
栗木　清智（同課班長）
菅　真一郎（同課主幹）

調査担当者　米村　大（同課主事）、江本　直（西合志南保育園）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と環境

合志台地は透水性が強く、雨水は地下に浸透することから、起伏の少ない傾斜の緩やかな地形である。菊池川水系である合志川は阿蘇外輪山の鞍岳を源とし、その合志川に流れ込む支流は台地を侵食する谷地形を形成している。本遺跡はこの台地の南西端に位置する。

台地上で営まれる農業は現在、水利が発達し水田化されるが、近年まで畑作地帯であった。水田化できるわずかな谷地形に限られ、火山灰より形成された肥沃ではない土地であった。そのため畑作主体の生業が営まれていたと考えられる。

妙泉寺公園には湧水池があり、この周辺に本遺跡とともに宿の山遺跡、梨の木遺跡、向島遺跡、須屋城跡が存在している。本遺跡の南側に隣接している堀川は、農業用水の確保を目的とし、江戸期が近世初頭に坪井川まで完成した。現在は、菊陽町の玄番橋を境にして下流を堀川と呼称されている。この水利を使用し、年貢米を運搬したという伝承もあるが詳細は不明である。本遺跡の字名である「船入」は、明治期に付けられた可能性が挙げられている。[註1] また、「船入」の地名は、堀川に接する本市幾久富の泉ヶ丘付近に字「舟入」が残る。

縄文時代

本市では旧石器時代の遺跡は発見されていない。御手洗遺跡は、縄文時代後期「御手洗式土器」の標式遺跡である。二子山石器製作遺跡（国指定史跡）では、玄武岩質安山岩を母岩として打製石器を製作した痕跡が良好に遺存する。これまで金峰山系の安山岩と考えられてきたが西原村の権現原に分布する高マグネシア安山岩（HMA）と極めて類似した特徴をもつことが指摘されている。[註2] 須屋城跡発掘調査では、曽畑式土器に先行する野口式と考えられる土器群が出土している。

弥生時代

平成元年から３年にかけた生坪地区農業基盤整備事業に伴う発掘調査では、弥生時代後期の竪穴建物が複数の遺跡において確認された。各遺跡の軒数は、石立遺跡４軒、八反田遺跡 15 軒、八反畑遺跡４軒、八反原遺跡 53 軒である。八反原遺跡の竪穴建物からは、内行花文鏡が出土している。須屋付近でも弥生時代の集落が存在しており、宿の山遺跡では竪穴建物が検出され、また宿の山遺跡、梨ノ木遺跡からは中期の甕棺が出土している。

塩浸川下流域の高木原台地には、３重の円弧を描く溝が検出された石立遺跡や、延長約 70 ｍの溝が検出された八反畑遺跡などがあり、環濠集落の可能性が考えられている。

古墳時代

合志川流域には多くの古墳が存在している。八反田遺跡、八反畑遺跡、石立遺跡、迫原遺跡、八反原遺跡が本市で調査され、昭和 63 年に上生上ノ原遺跡が県文化課によって発掘調査された。

八反原遺跡は、方形周溝墓 10 基、円墳 19 基が検出されている。4 世紀後半～末頃の方形周溝墓から 5 世紀前半以降の円墳へ推移する。八反原遺跡２・３号墳や上生上ノ原遺跡では、九州でも初期の馬具（轡）が出土した。[註3] また、上生上ノ原遺跡では三角板鋲留短甲が出土している。八反原遺跡の６基の周溝からは、殉葬馬の可能性が高い馬骨が馬具とともに出土した。以上のように、黒松古墳群や生坪古墳のある合志川中流域左岸の台地周辺には、朝鮮半島の渡来文化が認められ、中央政権との強い結び付きを示している。[註4] 沖田遺跡では上生上ノ原遺跡と同様、古墳時代前

期の竪穴建物が3軒検出された。

山本郡の分立した合志郡の範囲（合志・西合志・泗水・旭志・菊陽・大津町）には前方後円墳が分布しておらず、この地域の特色が挙げられる。

古代

貞観元（859）年合志郡から山本郡が分立し肥後国は14郡になる（『日本三代実録』巻2）。『和名類聚抄』によれば合志郡は合志郷、小川郷、山道郷、鳥嶋郷、口益郷、鳥取郷の6郷からなり比定地は諸説あり定まっていない。郡衙の推定地は小合志、高木原・千束遺跡、上鶴頭遺跡、住吉神社が挙げられるが不明な点が多い。八反田遺跡、八反畑遺跡、八反原遺跡、迫原遺跡の発掘調査では、合計165軒の竪穴建物が確認されている。出土遺物は、墨書土器や刻書土器をはじめその他の遺物の年代から7世紀後半から9世紀前半に及ぶ。

高木原遺跡では坂本氏が奈良時代の銅製帯金具（丸鞆）や鹿骨器を採取されている。さらに、千束遺跡では発掘調査の結果、方形に巡る溝、掘立柱建物、鹿骨器、円面硯、輸入陶磁器が出土している。

熊本県教育委員会による出口遺跡、揚土遺跡、峠遺跡の発掘調査において墨書土器が多数出土している。八反田A･B遺跡、八反畑遺跡、迫原遺跡、八反原遺跡においても墨書土器が認められ、7世紀後半～9世紀後半の遺物が出土しており、8世紀後半～9世紀前半の遺物が主体である。[註59]

中世

古代の律令体制は10世紀初頭には崩壊し、国司が徴税請負人となり地方政治を一任された。国司は郡司や有力農民に租税を請け負わせる方式を採った結果、次第に成長した開発領主は国司と対立を深め中央の貴族や社寺に土地を寄進することで領地の支配権を確立していく。この地域に関して「天満宮託宣記」に正暦3（992）年「合志荘」が大宰府安楽寺領となるとある。また「東大寺諸荘園文書目録」に久安4（1142）年、観世音寺に関係する荘園である「竹迫別符」をみることができる。

竹迫氏は12世紀末に合志郡地頭職として中原親能の4男中原師員が下向すると「肥後国誌」にある。また、竹迫氏は豊後の大友、肥後の鹿子木、三池氏と同族関係として家系図にある。さらに「妙正寺文書」では、貞和年間の14世紀半ばに鹿子木貞基から種継に代わり、竹迫を名乗るともあり、定説をみない。

合志氏は菊池系合志、中原系合志、佐々木系合志の3系統に別れるようであるが系譜を追える史料はない。

合志郡半郡の地頭職となった佐々木系合志は南北朝時代に北朝方として菊池氏と対峙し、武勇の優れた合志幸隆は大友氏とともに菊池城を攻め一時、陥落させる。天正13（1585）年合志氏は島津氏に降伏し、高重は薩摩羽月で殺害され、親為は幽閉後帰路の途中八代郡大野で死去したとされる。天正15（1587）年豊臣秀吉の九州平定が行われる。

須屋氏については、南北朝期の興国3（1342）年、菊池氏の武士起請文に須屋刑部という名がみられ、菊池氏の支配下にあったことがわかる。16世紀に合志氏が竹迫城跡に拠点を移し、家臣の財産を整理したと考えられる厳照寺文書「社寺方并侍中坪付写」には、須屋新九郎という人物がみられることから合志氏の家臣であったことが窺える。

須屋城跡では、発掘調査の結果、現存していたL字状の土塁の外側に幅約3m、深さ約2mの堀が南北方向に56m、また、東西に並行する長さ90mの2条の堀が確認された。これらの堀は、城域をT字状に区画する。土塁の出土遺物からは、14世紀～15世紀頃に築造された可能性が高い。[註60]

平成 13 年度に熊本県教育委員会により発掘調査が行われた船入遺跡において中世の館跡が確認された。周辺の地割りから推定される区画は、南北 97 m×東西 57 mである。出土遺物から 14 世紀中葉から 15 世紀中葉に存在し、須屋城と関係の深い人物の館跡と考えられている。[註7]

註 1）坂田 和弘 2006「船入遺跡Ⅱ」熊本県文化財調査報告　第 238 集

註 2）新村 太郎「熊本県合志市二子山に産する高マグネシア安山岩の化学組織および Sr 同位体比」

註 3）桃崎 祐輔 2007「馬具からみた中期古墳の編年」第 10 回九州前方後円墳研究会『九州島における中期古墳の再検討』

註 4）杉井 健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」第 13 回九州前方後円墳研究会『九州における首長墓系譜の再検討』

註 5）浦田 信智 1995「第 7 章　山本郡の独立」『西合志町史』

註 6）浦田 信智 2013「須屋城跡」合志市文化財調査報告書　第 2 集

註 7）角田 賢治 2007「船入遺跡」熊本県文化財調査報告書　第 217 集

第１図　船入遺跡周辺遺跡分布図

第１表　船入遺跡周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
1	中林古墳	栄 中林	古墳	古墳		円墳3基、うち1基は発掘調査が行われている
2	中林遺跡	栄 中林	縄文	弥生		弥生式土器
3	中林西原遺跡群	栄 西林・城山	古代・弥生	集落		千本遺跡 発掘調査平成3年、円墳現出土
4	後川辺遺跡群	栄 後川辺	古墳	弥生		梅雨期、南条、西原遺跡、発掘調査 昭和63年、野辺田式土器
5	ヤンボシ古墳	栄 村田	古墳	古墳		円墳
6	千束城跡	栄 城山	中世	城		
7	千頭怪遺跡	上広 千頭怪	弥生・他	集落		発掘調査 昭和51年
8	野付遺跡	福原 野付	縄文・他	弥生		縄文式、高堤式土器・土師器
9	宮東古墳	竹迫 薬敷	中世	寺院	市	古墳、一字一石経塔
10	陣ノ内遺跡	横矢富 陣ノ内	弥生・他	集落		墓地、埋蔵集落
11	荒ノ原遺跡	上広 荒町	弥生	弥生		弥生式、高堤式土器・土師器
12	小関遺跡	豊岡 小関	縄文・弥生	弥生		弥生式土器、石器・弥生土器
13	竹迫城跡	上広 城山	中世	城	市	中世城
14	木巻遺跡	上広 木巻	弥生	弥生	市	鋸状式住居跡、石手式鏃、重弧文式土器・石包丁
15	虚空蔵塔古墳	上広 蛇ノ尾	古墳?	古墳?	市	出雲の前方後円墳
16	御手洗遺跡	横矢富 御手洗	縄文・他	弥生	市	縄文後期・御手洗式土器・土師器
17	御白新城跡	豊岡 御白	中世	城		発掘調査
18	桑鶴遺跡	竹迫 桑原	縄文・弥生	弥生	市	昭和５０年発掘調査、縄文式期？
19	八久保遺跡	竹迫 八久保	縄文	弥生		阿高式・御領式
20	竹迫平土遺跡	竹迫 平土	縄文・他	弥生		発掘調査、三万田式、弥生中期
21	野辺遺跡	豊岡 野辺	古代・中世	弥生		骨蔵器
22	御黒山遺跡	横矢富 御黒	弥生	弥生		
23	御領遺跡	竹迫 御領	縄文・弥生	弥生		土偶・御領式土器、鹿程よりゴホウラ製貝輪
24	貝塚遺跡	豊岡 貝塚	弥生	弥生		神谷文・高堤式土器
25	東阿弥陀堂古墳	豊岡 東木	古墳	古墳		１２基、平成16年調査
26	蛇ノ尾城跡	上広 蛇ノ尾	弥生	弥生		鋸状式住居跡、中世城の可能性
27	上牟須遺跡	上牟 須野	弥生	弾跡		
28	城遺跡	上牟 城跡	古墳	弥生		野辺田式土器、「日本書紀」紀元の本拠
29	神田遺跡	野々島 神田	縄文・他	弥生		丸木舟、御領式・野辺田式・土師器・石器
30	高松田原遺跡	合志 高松	縄文	集落		表面に土器編片散布・石斧出土
31	高松原の遺遺跡	合志 高松	弥生	弥生		
32	北野遺跡	上牟 北野	弥生	弾跡		
33	聖寿寺跡	上牟 城	中世	寺社		
34	上原遺跡	上牟 上原	縄文・奈良	弥生		
35	城塚遺跡	上牟 城	縄文・古代	弥生		
36	城堂遺跡	上牟 城跡	中世	城		
37	城敷古墳	上牟 城敷	古墳	古墳		
38	アミダノ遺跡	野々島 古間・鉈田	縄文・古代	弥生		
39	延寿寺遺跡	野々島 古間	縄文・古代	弥生		
40	浜田遺跡	野々島 浜保	縄文・古代	弥生		
41	永田大遺跡	野々島 永田	弥生	弾跡		支石墓
42	永田石棺	野々島 永田	古墳	弾跡		
43	瀬戸古墳	野々島 瀬戸	古墳	古墳		
44	沙羅石棺	上牟 沙羅	古墳	弾跡		
45	笹塚遺跡	上牟 笹塚	弥生・古墳	弥生	市	市指定 笹塚古墳
46	太田遺跡	野々島 太田	弥生・古墳	弥生		
47	向原遺跡	上牟 向原	弥生・古墳	弥生		
48	アナンク遺跡	上牟 須賀	弥生・古代	弥生		
49	関原遺跡	合志 関原	縄文・古代	弥生		
50	古間原遺跡	野々島 古間	弥生・古墳	弥生		
51	城屋敷跡	上牟 城	弥生	弥生		
52	中尾遺跡	野々島 天神島・中尾原	縄文・弥生	弥生		縄文・弥生・古墳期土器片
53	高松古墳群	合志 鉈の谷	古墳	古墳	市	
54	生洋古墳群	合志	古墳	古墳	市	市指定 生洋塚山古墳
55	八反田遺跡	合志	弥生	弾跡		出合谷之前遺跡、墓程・壺・柱・石斧
56	立野原穴群	合志 立野	古墳	古墳		横穴墓あるかも成る
57	小合志古墳	合志 小合志 小合志原	古墳	古墳		円墳、目石場穴石室消滅、副葬品多数
58	弘生原遺跡	合志 弘生	弥生・古墳	弥生		弥生野辺田式、土師器・須恵器土器
59	須原パヤマ古墳	合志 須原	古墳	古墳		円墳、鉄武刀程、鉄鏃・玉字あると土師器
60	江原遺跡	合志 江原	古墳	弥生		野辺田式、土師器・須恵器片多数出土
61	須原本宮古墳	合志 須原	古墳	古墳		前方円程
62	高木原遺跡	合志 高木	縄文・奈良	弥生		縄文後期、奈良時代、出土品大量
63	合志郡家推定地	野々島	古代	弥生		
64	玉渡寺跡	合志 玉渡寺	中世	寺社		
65	弘生城跡	合志	中世	城		
66	塚口横穴群	合志 塚口	古墳	古墳		
67	八反田遺跡	合志 弘生	弥生・古墳	集落		出西合志町
68	野々島遺跡	野々島 北	弥生・他	弥生		御領、弥生・野辺田式土器・土師器
69	八反田遺跡	野々島 八反田	縄文・弥生	弥生		出西合志町貝塚貝、縄文～弥生土器、中央小校舎
70	フタ二遺跡	野々島 天神免	古墳	古墳		円墳
71	相郷田遺跡	野々島 中原・相郷田	縄文	弥生		縄文早期
72	西合志中学校跡地	野々島 東原	縄文・古墳	弥生		御領式土器・古式勾玉・野辺田式・須恵器
73	野々島古墳	野々島 八通丸	中世	弥生		八通丸
74	在間遺跡	野々島 在間	弥生・古代	弥生		
75	野田原遺跡	野々島 野田原	弥生・古墳	弥生		
76	鉈原遺跡	野々島 鉈田原	古代	弥生		
77	井天山遺跡遺跡	野々島 野々島	古代	弥生		祭祀
78	愛東寺遺跡	野々島 外園	中世	寺社		
79	在間土塁跡	野々島 在間	中世	弥生		
80	一子山石棺墓群	野々島 天神免	縄文	弥生	市	石棺各種・原石
81	中原宝石墓	野々島 中原	弥生	弾跡		
82	丸の内遺跡	野々島 丸の内	縄文	弥生		
83	笹山遺跡	御代志	縄文	弥生		
84	小合志原遺跡	合志 辻久保 小合志原	縄文	弥生		
85	辻久保遺跡	合志 辻久保	縄文	弥生		
86	岩原石棺	野々島 遠鉄岩原	古墳	弾跡		石棺群あり
87	中野遺跡	野々島 中野	縄文	弥生		
88	木原野遺跡A・B	野々島 木原野	縄文	弥生		石器
89	堀の山（横屋）	須屋 堀の山	弥生	弾跡		弥生合口墓程・土師器片一括
90	梨の木	須屋 梨の木	縄文	弥生		
91	向島	須屋 向島	縄文	弥生		
92	須屋城跡	須屋 城跡	縄文～中世	城		合志市調査 中世城跡
93	妙東寺跡	須屋	中世	寺社		
94	メレ観音古墳	合志	古墳	古墳		
95	須原遺跡	野々島 須原	弥生・古墳	弥生		
96	**船入遺跡**	**須屋 船入**	**中世**	**館**		**発掘調査 平成13年**
97	鉈原城跡群	合志 鉈原	古墳	古墳		出西合志町調査
98	豆ヶ原遺跡群	上広 豆ヶ原、横田、新地	縄文・弥生・古代	弥生		発掘調査 平成元年
99	上狸遺跡	上狸	古代	弥生		発掘調査 平成元年
100	桜山遺跡	上広 桜山	古代	弥生		骨蔵器
101	神遺跡	上広 神	古代	弥生		発掘調査 平成３年 重要土器
102	出口遺跡	上広 出口	古代	弥生		発掘調査 平成３年 重要土器
103	横土遺跡	上広 横土	古代	弥生		発掘調査 平成３年 重要土器
104	中野遺跡	上広 中野	縄文	弥生		縄文晩期
105	天神末遺跡	豊岡 天神末	古代	弾跡		不時発見 骨蔵器２り又都等・唐式鏡出土
106	寺崎城跡	上広 寺崎	弥生・中世	城		中世城跡の可能性
107	今町遺跡	横矢富 今町	中世	弾跡		出合志役場跡、現町営住宅付近

第Ⅲ章　調査とその成果

第１節　遺跡の概要

今回の発掘調査は保育園舎が建設される範囲の約 800 ㎡を行ったが、事前に行われた確認調査によって「国道北バイパス建設に伴う船入遺跡の発掘調査により判明した堀の続きと思われる溝状遺構が検出されたこと。出土遺物が中近世期のものと考えられることから中世の居館の可能性がある。」との遺跡認識の基に発掘調査に入ることができた。

調査地は丘陵末端にあたり、須屋城跡（平成 13 年～ 18 年発掘調査）の南側約 100 m、船入遺跡（平成 13・17 年発掘調査）の東側約 50 mに位置する。須屋城跡と船入遺跡の発掘調査では、中世の館跡とともに多くの陶磁器類が確認された。

須屋城跡は字「下屋敷」に位置し、字境が城域となっている可能性がある。字「下屋敷」範囲の北側には、「陣ノ山」と呼ばれる地名が残る（第３図　須屋城跡略測図）。その他、城跡に関わる地名としては、字「西屋敷」、「中園屋敷」、「迫屋敷」の屋敷名とともに船入遺跡の北東側に「的場（まとば）」と呼ばれる地名なども認められる。

今回、確認された遺構は、溝状遺構４基、土坑８基、集石遺構２基である。

調査地のほぼ中央の４基の土坑は、同じ方位軸に並び、配置されている。４基の土坑は、方形を呈し、約 1.9 ～約 2.4 m×約 2.6 m～ 3.1 m、深さ約 0.8 m～ 1.2 mを測る。その４基は、１基に対をなした２基が認められた。出土遺物は、青磁片、すり鉢片、鉄鎌が出土した。また、炭化物や焼土が底面付近に広がっていた。これらの土坑は、中世～近世の墓、もしくは地下式土壙ではないかと判断する。

集石遺構は、五輪塔の部材が集石のなかに遺棄された状態で出土した。調査区周辺には、五輪塔の部材が散布する箇所があり、寺院があったという伝承も残る。

柱穴の組み合わせから建物を検出することはできなかった。調査区では、遺物が少なく、建物を検出することができなかった点から居住域ではなく、墓域の可能性が高い。溝状遺構は、居住域と墓域を分ける区画溝と考えられる。

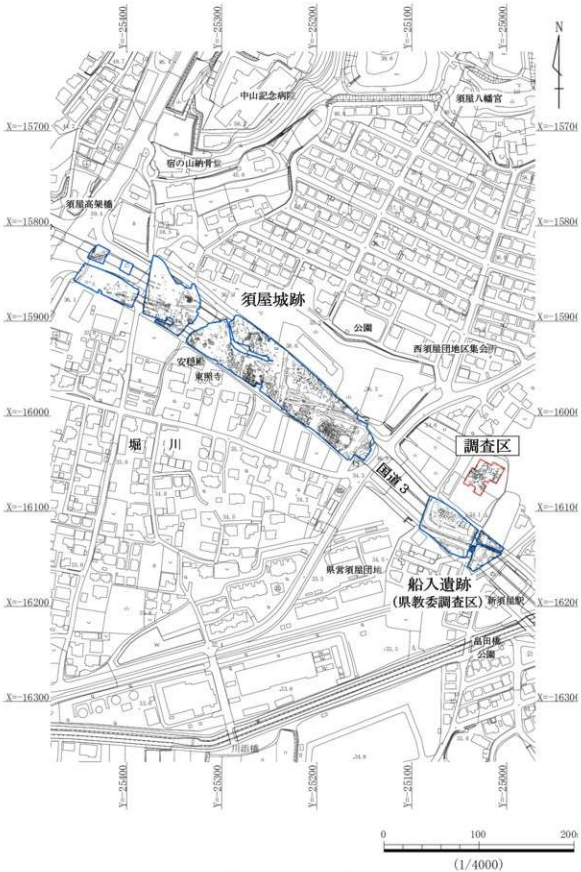
第２節　遺跡の層位

１層：耕作土	… 下面は床土。
２層：暗灰茶褐色土	… 固くしまり、橙色粒、１～ 5mm 大の小礫を多く含む。
３層：灰黄褐色土	… 固くしまり、橙色粒、１～ 5mm 大の小礫を多く含む。２層の土が一部ブロック状に混じる。
3’層：灰黄褐色土	… しまり弱く、２・３層の土とロームが混じる。
４層：明黄色粘質土	… ローム層

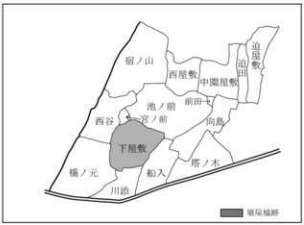
当遺跡の基本層序を模式的に示したものが、上図である。

調査区は本来水田耕作地であり、１層耕作土は厚さ約 20cm、ほぼ調査区全面を覆っていた。その下２層、３層は客土であり、調査区内各地点毎に厚さが異なり、旧地形はかなり起伏があったことが推測される。

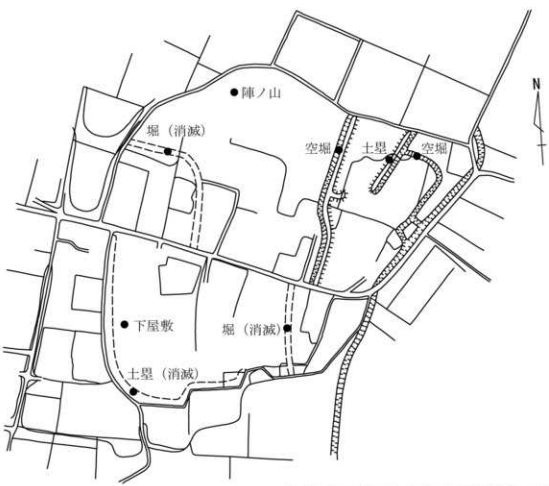
遺構検出は４層上面で行った。調査区東南部、SD02（溝状遺構）南東壁面で土層の堆積状況を確認すると、SD02 とその周辺は３層、３’層により埋められており、SD02 埋没中に周辺を含めた整地が行なわれ、その後整地が繰り返されたものと考えられる。


N
中山記念病院
須屋八幡宮
宿の山納骨堂
須屋高架橋
須屋城跡
公園
西須屋団地区集会所
安穏寺
東照寺
堀
川
調査区
国道3
県営須屋団地
船入遺跡
(県教委調査区)
新須屋駅
品田橋
公園
川西橋
0
100
200
(1/4000)

第2図　周辺地形図



字図（須屋）

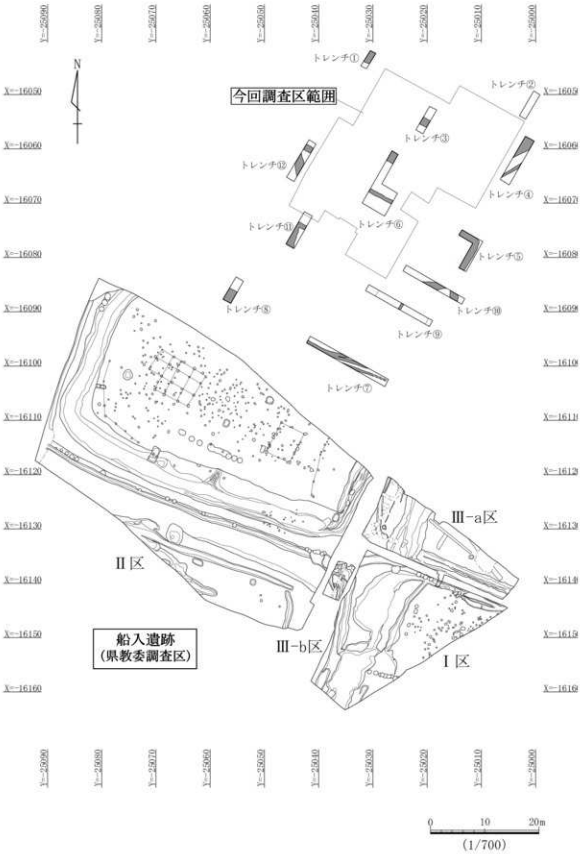


須屋城跡略測図（「熊本県の中世城」熊本県教育委員会より転載）

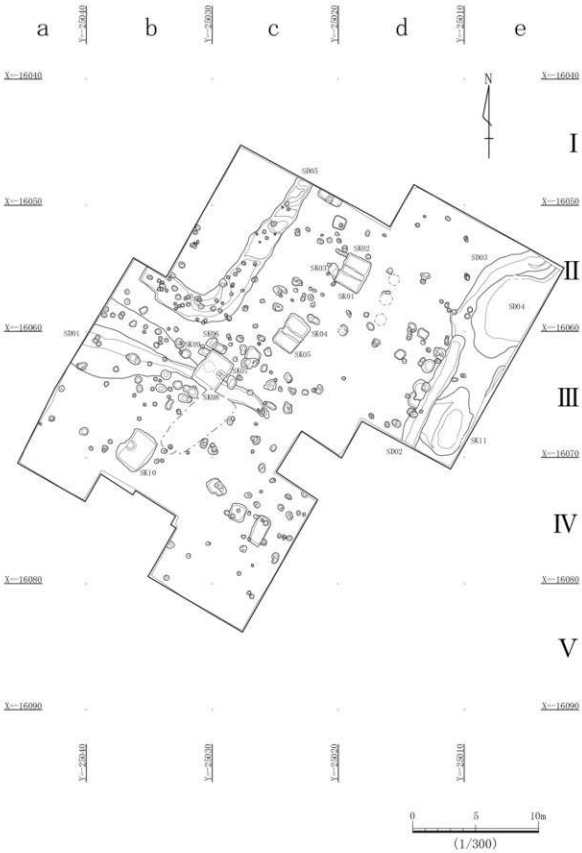
0　50　100m

(1/2500)

第 3 図　須屋城跡略測図



第４図　確認調査及び船入遺跡（県教委調査区）Ⅰ～Ⅲ区遺構配置図



第５図　船入遺跡遺構配置図

第３節　遺構

1. 遺構の出土状況

検出された主な遺構はSD：溝遺構、SK：土坑、集石遺構、ピット群、その他であるが、以下、それらの出土状況の報告を行うこととする。

SD01はⅢ－ａ～ｃグリッドを西走し裾広がりの形状を呈している。元来的には自然的な形成状況を示すものとみられる。SD02・03・04はⅡ・Ⅲ－ｄ･ｅグリッドを北に走り、途中で途切れながら複流化している。東側には大きく２か所に区分けされる集石遺構があった。SD05はⅠ・Ⅱ－ｂ･ｃグリッドに見られる規則性をもった溝である。遺構の区域を分かつものであろうか。

SK01～03は「確認トレンチ③」で溝遺構とみられたものであるが、四方に途切れ土坑とできた。同じくSK03・04は「確認トレンチ」での確認はなかったが前者と同じく四方が途切れ同様の土坑と判断できた。SK06～09はSD01の北側面に検出された。SK10はⅣ－ｂグリッドの北側よりで検出された。これ等のSK01～10は大きく４群に分かつことができ、ほぼ南北に並んだ状態を呈している。なお、Ⅳ－ｃグリッドで撹乱されたところには位置的状況からSKのもう１群が所在していた可能性がもたれた。

ピット群は全体的にばらついた状態での検出であったが、SD01やSD02の西側周辺にやや纏まった状態にあり、いくつかは土坑と捉えられるものもあろう。

2. 土坑

SK01、SK02、SK03

Ⅱ－ｃ･ｄグリッド中央部で検出した。確認調査トレンチ③で溝状遺構との可能性が報告されていたが、平面で四方が途切れ溝遺構ではなく３基の土坑として調査を進めた。SK03の掘りこみが浅くSK02に断ち切られていた。そしてSK01とSK02は対をなす１つの大型の土坑であると判断した。全体は方形で、長径2.62ｍ、短径2.12ｍ、深さ0.89ｍが測れ、西側にはステップ状の設けがあった。二つの長形の土坑が対をなしている。

SK04、SK05

調査区のほぼ中央部に当たるⅢ－ｃグリッドで検出された。確認調査ではトレンチ⑥で溝状遺構との可能性が報告されていたが、上記遺構と同じく平面で四方が途切れるので、溝遺構ではなく２基の土坑として調査を進めた。そして二つの長形の土坑が対をなす大型の土坑であると判断した。全体は方形で長径2.80ｍ、短径1.96ｍ、深さ1.01ｍが測れ、西側にはステップ状の設けがあった。

SK07、SK08

調査区Ⅲ－ｂグリッドに集中しSD01の頭部を断ち切った状態での出土であった。SK07、SK08が重なり上記遺構と同じく二つの長径の土坑が対をなした大型の土坑を形成していた。全体は方形で長径2.95ｍ、短径2.25ｍ、深さ0.82ｍが測れ、西側にはステップ状の設けがあった。ほぼ中央部の上位には十数個を数える不揃いな自然石の集石があった。ほぼ中央の底部からは鉄器片が出土し、底面にわずかな焼土灰土がみとめられた。

SK10

調査区Ⅳ－ｂグリッドで検出できた。全体は方形で長径3.10ｍ、短径2.56ｍ、深さ1.25ｍが測れた。対をなす長径の土坑の確認に戸惑うところがあったが、最終的に全体形状や西側壁面底部にステップ状施設が認められることなどから、上記３基の遺構と同じくするものとの判断に至った。埋土には大量の焼土やカーボンがあり、すり鉢片の出土もあった。一部壁面には焼けた痕跡も見ら

れた。

以上、調査地のほぼ中央部にSK01～10の土坑が南北に並んだが、対をなした4基の大型の土坑に集約できるものであろう。

3. 集石遺構

集石遺構Aは、SK11の上位で検出され、長径3.12 m、短径1.68 mを測る。また、集積遺構Bは、SD03の上位で検出され、長径6.66 m、短径5.16 mを測る。2基の集石遺構は、皿状の凹地に集石されていた。丸石や礫石に混じり凝灰岩の切石があった。凝灰岩製の火輪、水輪、地輪片が含まれており、五輪塔やその囲い石等が崩され遺棄されたものと判断される。

4. 溝遺構

SD01は自然作用を主に形成されたものとみられ、西走し裾広がりを呈する溝で、長さ15.80 m、最大幅6.10 m、E－F断面で深さ0.80 mを測る。同じくE－F断面では2段さがりの形状を示している。中央部からやや東寄り部分にはSK06～09やピット群が集中しており、一帯を頭部付近と称すれば、さらなる東側の頭部付近にはピットがあり、内部からは青磁片と鉄器片の出土があった。全体的には雨水等の流路であろうが、付近の妙泉寺公園や小字中園屋敷の台地裾部等からは湧水地が認められることなどからそれらの一つとしての可能性もあろう。

SD02は調査区東側で検出し、今回の調査で最も溝遺構らしき形状を示している。南走し長さ9.54 m、断面はU字形を呈し、ほぼ中央部で幅1.46 m、深さ0.65 mを測れ、人為的に掘られたものであることが知れる。北から南へ下降しており、底面の高低差は約0.40 mを測る。西側面にはピット群が、東側には集石遺構がある。

SD03は幅広く北走しており西端にSD02が掘られ、北側には皿状を呈するSD04が設けられたものと見られる。SD02の東側とSD04には集石遺構が検出された。凹地を呈するところの2か所に切石、礫石類を廃棄されたものであろう。

SD05は鍵形の形状をなしている。通しての長さは19.0 mで中央部での幅は2.14 mであった。3か所の断面を示すがいずれも浅く、最大の深さ0.23 mを測るに過ぎない。溝の堆積は小さな砂粒が殆どで、雨水等を流す程度の緩やかな水路と見られる。

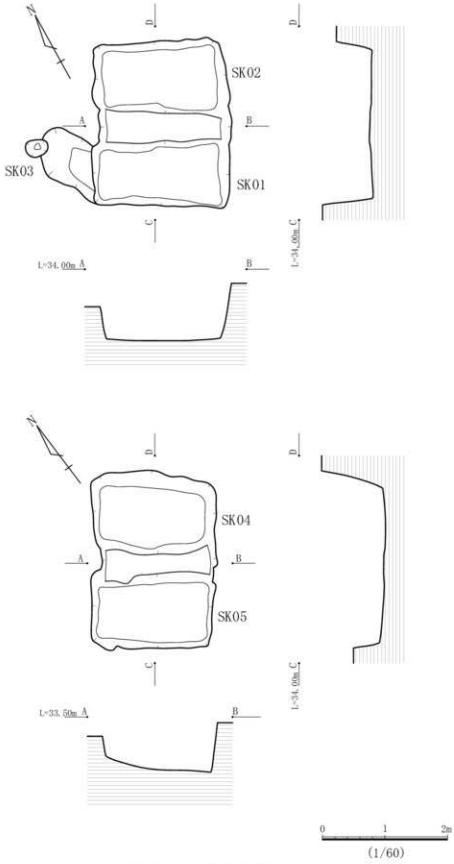
5. ピット群

Ⅰ－cグリッド	1基	Ⅲ－bグリッド	44基
Ⅱ－bグリッド	42基	Ⅲ－cグリッド	32基
Ⅱ－cグリッド	53基	Ⅲ－dグリッド	4基
Ⅱ－dグリッド	25基	Ⅳ－bグリッド	6基
Ⅱ－eグリッド	25基	Ⅳ－cグリッド	27基
Ⅲ－aグリッド	5基	Ⅴ－cグリッド	2基
合　計			266基

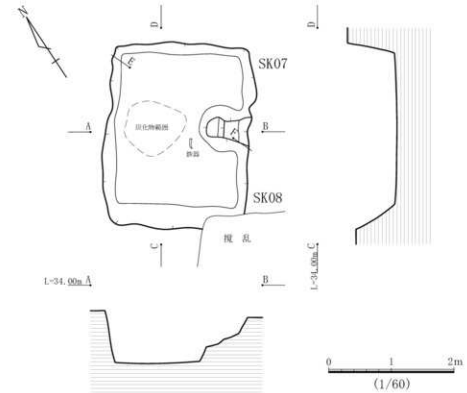
ピットや周辺からは青磁片やすり鉢片が出土し、土師質土器と鉄片が共伴しての出土もあった。

6. その他

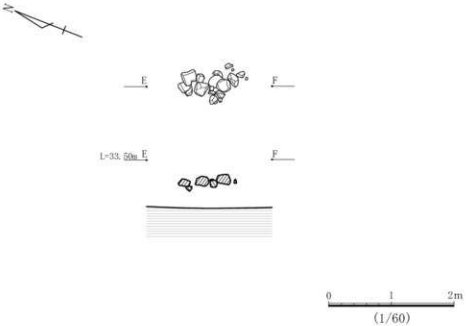
今回の調査地の中に設けられていた確認調査のトレンチは③と⑥であり、前者には溝遺構の存在、後者にはSX01の不明遺構が検出されていた。以上については、上記したように両者はそれぞれに対をなす土坑と溝遺構であると判断することができた。可能性がもたれた堀跡や居館に関連する遺構の検出までには至っていない。



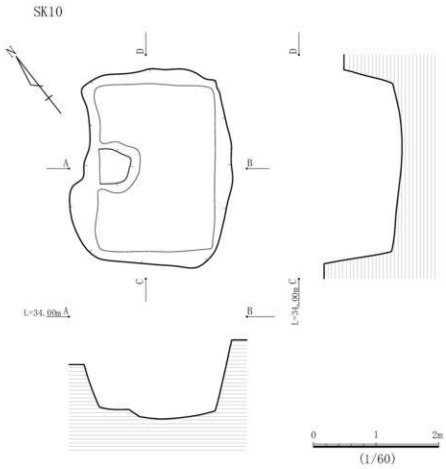
第６図　土坑実測図（1）



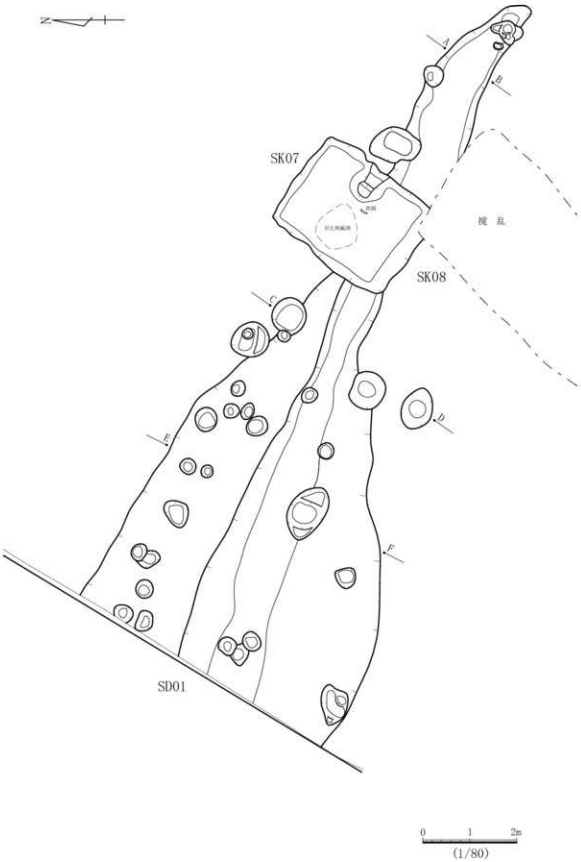
SK07



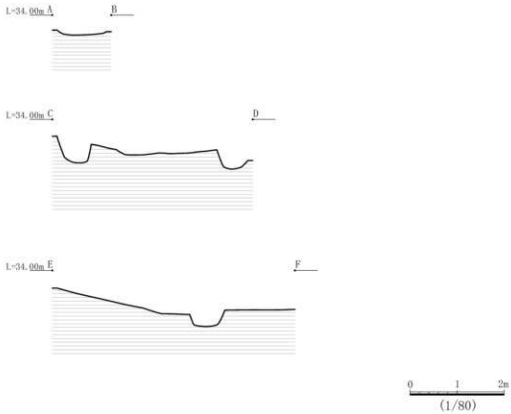
第７図　土坑実測図 (2)



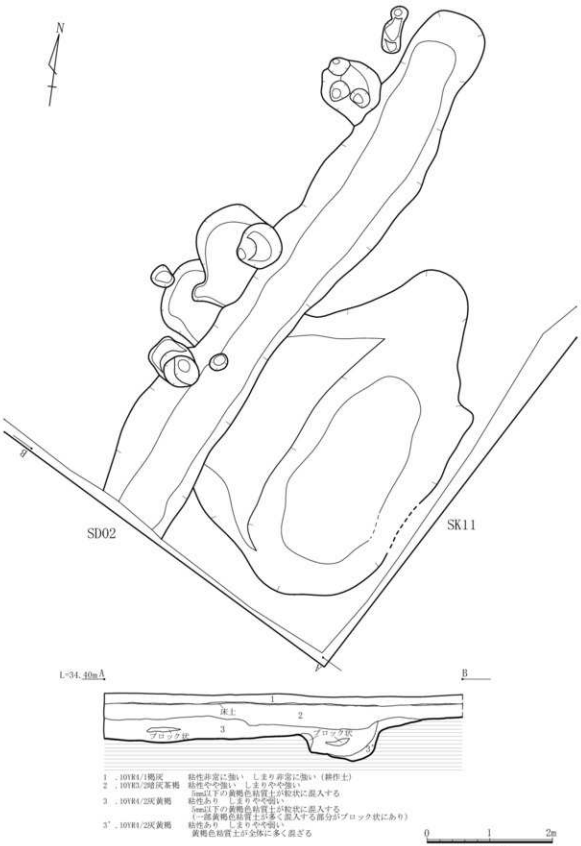
第８図　土坑実測図（3）



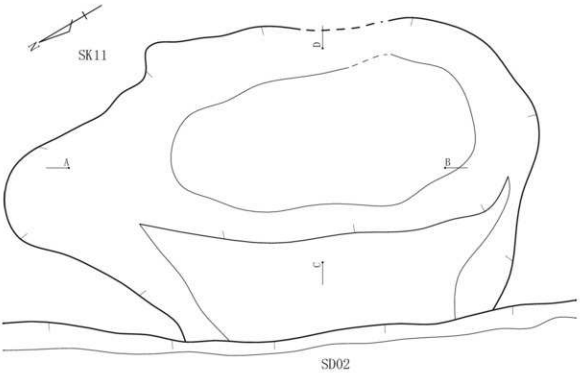
第 9 図　SD01 実測図 (1)

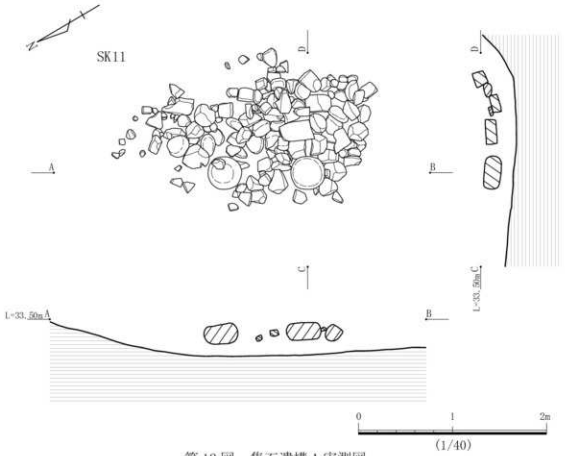


第10図　SD01 実測図 (2)

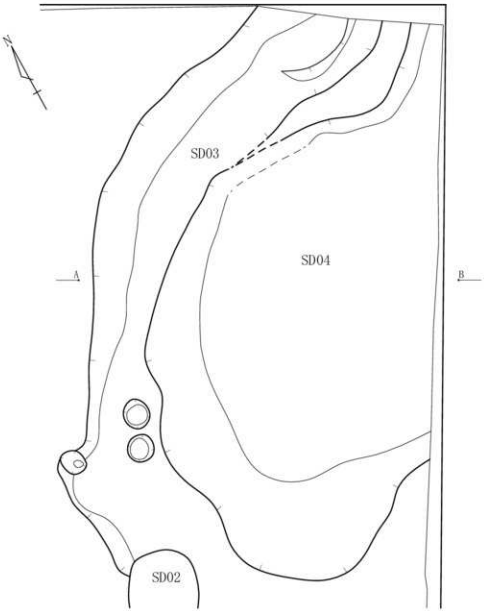


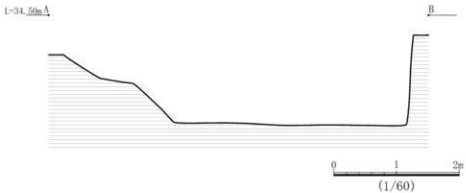
第 11 図　SD02 実測図



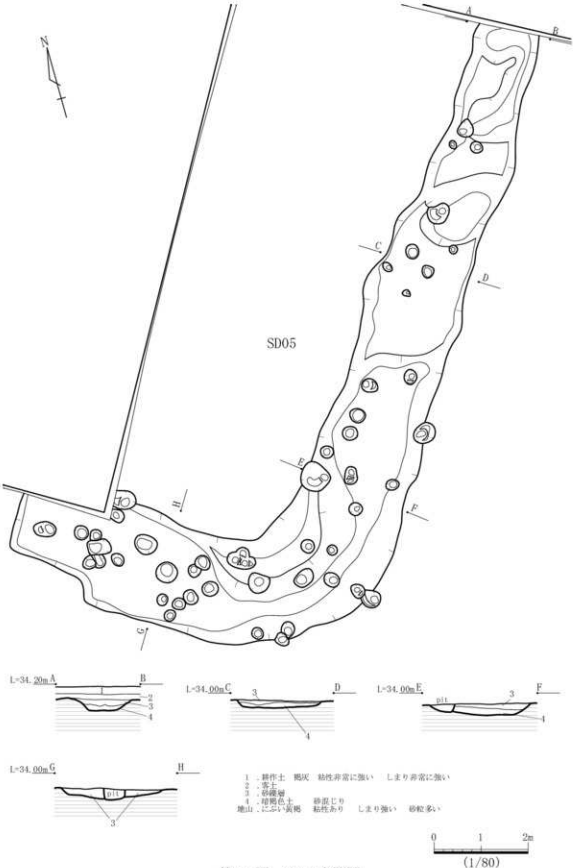


第 12 図　集石遺構 A 実測図





第 13 図　SD03・04 実測図



第 14 図　SD05 実測図

第4節　遺物

本調査での出土遺物は主に、陶磁器・土器そして鉄製品・石製品・石造品であった。遺構に伴うものを中心に、遺跡の性格を示しかつ実測可能な遺物を選択し、掲載している。

01　瓦質土器　　すり鉢

SK04から出土した。底部は平底で、体部は直線的に広がり、口縁部直下からさらに外に開く。7条の櫛状工具により、見込みには放射状に、体部には底部の端から口縁部に向けて交差状に、摺目が付けられている。内器面の口縁部下と底部近くは磨耗が著しい。

02　瓦質土器　　すり鉢

SK11から出土した。体部は直線的に開く。6条の櫛状工具による摺目は底部端から隙間なく施されている。

03　青磁　　碗

SK07・08から出土した。高台の刳りは浅く底部は厚い。高台内と畳付は露胎、外器面は畳付まで、釉が垂れている。

04　石製品　　温石

SK11から出土した。滑石製石鍋の口縁部で、転用品である。外面は縦方向に、内面は斜め方向に、削られており、外面はより加工が細かい。小孔が一部残っており、欠損品である。

05　鉄製品　　鎌

SK08から出土した。鎌の一部で、全体的に作りは薄く先端部を欠く。

06　石製品　　石臼

SK10から出土した。石材は輝石安山岩である。目は摩耗しており、下臼であろうか、軸穴がわずかに残る。

07　石製品　　石臼

SK11から出土した。石材は角閃石安山岩である。目は僅かに残存し、上臼であろうか、上面にはもの入れと思われる部分が残る。

08　石造品　　水輪

SK11から出土した。石材は凝灰岩である。側面形は横方向に長く、下面を僅かに欠く。表面の剥落が著しい。

09　石造品　　基壇部材

SK11から出土した。石材は凝灰岩である。平面は長方形、断面も長方形である。長軸の一端を欠き、全体的に剥落も著しい。

10　石造品　　基壇部材

SK11から出土した。石材は凝灰岩である。平面は長方形、断面は台形である。長軸の一端を欠く。全面に加工痕があり、下底面には線刻がある。

11　石造品　　基壇部材

SK11から出土した。石材は凝灰岩である。平面は長方形であろう、断面は台形である、長軸の一端を欠き、全面に加工痕がある。

12　石造品　　基壇部材

SK11 から出土した。石材は凝灰岩である。平面形は不明、断面は台形である。一端は欠損し、部分的に加工痕が観察される。

13　瓦質土器　　すり鉢

SD01 から出土した。口縁部はやや厚い。6 条の櫛状工具による摺目が口縁部付近まで施されている。片口と思われる。

14　瓦質土器　　すり鉢

SD01 から出土した。口縁部は厚く、体部は直線的である。9 条の櫛状工具による幅広の摺目は交差状に施され、内器面口縁直下は磨耗が著しい。

15　瓦質土器　　不明

SD01 から出土した。小破片で器種、部位ともに不明である。外器面は横方向に丁寧に磨かれている。

16　瓦質土器　　火鉢

SD02 から出土した。口縁部は断面三角形に肥厚し、上端は平坦である。外器面には二条の突帯を貼付け、口縁部下と突帯間には菊花の、一条目、二条目の突帯間には連子状の印文が施されている。

17　瓦質土器　　すり鉢

SD10 から出土した。平底の底部は薄く、体部はやや丸みを持って立ち上がる。6 条の櫛状工具による摺目は、底部端から施されている。外器面は強いナデ調整で、指頭痕が残る。

18　陶質土器　　すり鉢

SD01 から出土した。5 条の櫛状工具による摺目は、幅が狭く、目数が揃わず、弧状に斜め方向に施されている。

19　青磁　　碗

SD02 から出土した。口縁部はやや内湾する。総釉で、外器面に小さな連続蓮弁文がヘラ描きされている。

20　青磁　　碗

SD10 から出土した。高台は細く、底部は厚い。全面に施釉の後、高台内のみ釉ハギされている。外器面には幅広の蓮弁文、見込みには花文がヘラ描きされている。

21　青磁　　碗

SD10 から出土した。高台は高く太く、一部釉垂れがある。畳付の釉は掻き落とされ、高台内は露胎である。見込みには花文がヘラ描きされている。

22　白磁　　皿

SD05 から出土した。高台の刳りは浅く、底部は厚い。高台と外器面体部下部は露胎である。

23　染付　　皿

SD05 から出土した。高台は先端が細く、総釉で、畳付には砂目が残る。見込みには、松文が描かれている。

24　鉄製品　　釘

SD01から出土した。断面は方形で一端が細い。釘であろう。

25　鉄製品　　刀子

SD01から出土した。柄部分には凸部が確認できる。刃部は一部欠損している。

26　石製品　　不明

SD01から出土した。石材は凝灰岩である。両側縁を一部欠損しており、不定形である。上面に鋭利な工具痕が、同方向に何条も走っている。

27　石造品　　火輪

SD04から出土した。石材は凝灰岩である。軒口は広く、隅棟は直線的である。全面に工具痕があり、下面は著しく破損している。

28　青磁　　碗

Ⅲ－ｂグリッドピット群から出土した。口縁端部はやや外反し、内器面には蓮弁文がヘラ描きされる。釉は薄く、透明感がある。

29　鉄製品　　釘

Ⅱ－ｄグリッドピット群から出土した。断面は方形で、頭部は湾曲している。

30　鉄製品　　不明

Ⅲ－ｃグリッドピット群から出土した。用途は不明であるが、板状で端部はやや薄い。

31　石製品　　石臼

Ⅳ－ｂグリッドピット群から出土した。石材は輝石安山岩である。目の残りは良く、下臼であろうか、軸穴も一部残る。

32　土師器　　皿

Ⅱ－ｅから出土した。底部は厚く、体部は開きながら立ち上がる。底部には回転糸切痕がある。

33　土師器　　小皿

Ⅱ－ｄグリッドから出土した。ほぼ完形の小皿である。底部は厚く、体部は短く開きながら立ち上がり、口縁端部は薄い。底部には回転糸切痕と板状圧痕がある。

34　土師器　　小坏

Ⅲ－ａ･ｂグリッドから出土した。短い体部は中辺で折れ、やや外反し、口縁端部は平坦面がある。口縁部は一部にススが付着しており、灯明皿と考えられる。底部には回転糸切痕と板状圧痕がある。

35　土師器　　碗

Ⅲ－ａ･ｂグリッドから出土した。端部が尖り気味の高台は、高く、大きく外に開く。

36　瓦質土器　　すり鉢

Ⅱ－ｅグリッドから出土した。7条の櫛状工具による摺目は、ほぼ直立している。

37　土師質土器　羽釜

Ⅲ－ａ･ｂグリッドから出土した。胴部中ばに鍔を貼付け、鍔から下は底に向かって急に丸くなり、被熱痕が観察される。

38　土師質土器　壺

Ⅱ－ｅグリッドから出土した。耳付壺の肩部であろう。耳部は、把手を貼付け、棒状工具に

より穿孔している。

39　青磁　　碗

Ⅱ－ｅグリッドから出土した。口縁部は端部で急に外弯する。小片のため、詳細不明である。

40　青磁　　碗

Ⅱ－ｅグリッドから出土した。口縁部はわずかに厚く、外器面は口縁下に類雷文帯がある。外器面・内器面とも片切彫りで施文されているが、小片のため詳細不明である。

41　青磁　　碗

Ⅱ－ｅグリッドから出土した。高台の刳りは浅く、外に開く。総釉で高台内の釉は薄い。見込みと畳付に、ともに４箇所目跡が残る。

42　青磁　　碗

Ⅱ－ｅグリッドから出土した。高台はわずかに外に開き、釉は部分的に高台畳付内側まで垂れている。高台内は露胎、畳付の釉は、掻き取られている。見込みにヘラ描き文があるが、詳細不明である。

43　青磁　　碗

Ⅲ－ａ･ｂグリッドから出土した。口縁端部の釉は薄く、外器面口縁下に片切彫りの類雷文帯がある。

44　青磁　　皿

Ⅲ－ａ･ｂグリッドから出土した。 口縁は輪花で、体部下部で腰が張り、「く」の字状に屈曲した後、口縁部に向かって大きく外反して開く。大きめの高台が付くと推測され、内器面口縁直下にヘラ先による二重の波状文が廻る。

45　青磁　　碗

Ⅲ－ａ･ｂグリッドから出土した。高台の刳りはごく浅く、底部は厚い。釉は露胎の高台内まで一部垂れており、畳付の釉の掻き取りは弱い。外器面にヘラ描き蓮弁文の一部が僅かに残る。

46　白磁　　皿

Ⅱ－ｅグリッドから出土した。全体に器壁は薄く、腰下部は丸みを持ち、やや内湾しつつ口縁部に向かって開く。口縁部はやや厚く端部で更に大きく外反する。総釉で、高台端部は、外器面側を斜めに釉が掻き取られており、尖っている。

47　白磁　　小杯

Ⅱ－ｅグリッドから出土した。高台は厚く、外に開く。体部は腰部で強く屈曲した後、ほぼ直立する。釉は一部高台まで垂れており、高台内は露胎、畳付の釉は掻き取られている。

48　白磁　　碗

Ⅲ－ｃグリッドから出土した。器壁は非常に薄く、鎬蓮弁文の花弁の先端は口縁で輪花になっている。口縁端部は面取りされている。

49　白磁　　皿

表土から出土した。高台の刳りは浅く、直立し、高台内は露胎であるが、釉が一部垂れている。畳付は、砂粒が厚く全面に釉着している。

50　染付　　皿

表土から出土した。高台はほぼ直立し、腰部は丸味を持ち、外へ開く。総釉で、畳付の釉は掻き落とされている。内器面底部端には二重の圏線、見込みには草木文が描かれている。

51　染付　　皿

Ⅲ－ｃグリッドから出土した。高台端部は欠損しているが内傾するようで、腰部からは直立に近い形で立ち上がる。外器面は釉切れが見られ、高台端部内側は釉が掻き落とされている。内外器面ともに施文され、内器面底部には二重の圏線が描かれている。

52　染付　　皿

Ⅲ－ｂグリッドから出土した。高台は内傾し、腰部から外反する口縁部に向け、大きく開く。総釉で、畳付部は斜めに釉が掻き落とされている。内器面には圏線と花文が、外器面には唐草文が描かれている。

53　陶質土器　鉢

Ⅱ－ｅグリッドから出土した。底部は平底で、体部は直線的に開く。内外面ともに底部から斜め上方向へのハケメが観察される。

54　陶器　　急須

Ⅲ－ｂグリッドから出土した。急須の身の部分かと思われ、口縁部を内側に折り返して蓋受部を作っている。内外器面ともに施釉され、蓋受部は露胎である。

55　鉄製品　　鎹

Ⅲ－ｃグリッドから出土した。断面は台形で、一端を欠く。

56　石製品　　円盤状加工品

表土から出土した。石材は砂岩で、平たく、厚い。側面にのみ加工を施しており、用途は不明である。

57　石製品　　茶臼

表土から出土した。石材は角閃石安山岩である。小型であることから茶臼で、下臼の受皿部と考えられる。上面は磨かれ、下面は鑿で丁寧に整形されている。

58　石造品　　水輪

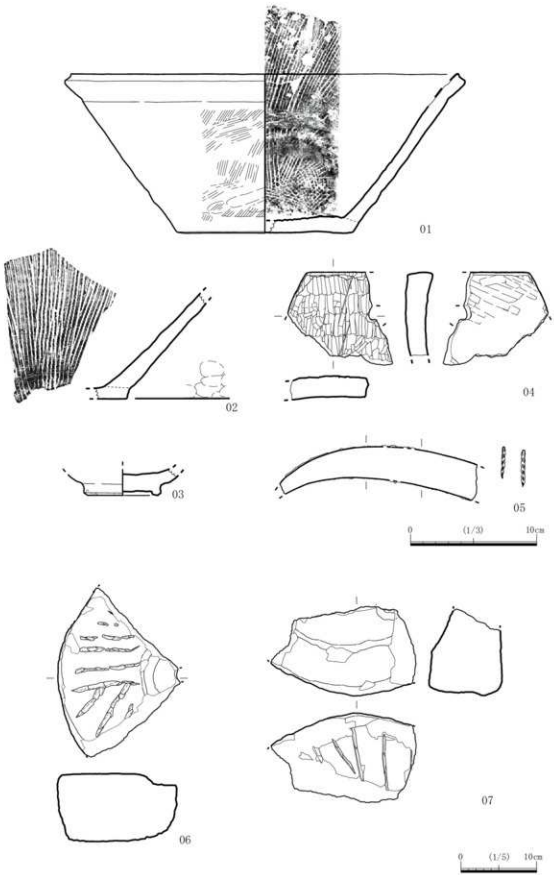
調査区から出土した。石材は凝灰岩である。欠損が著しいが、側面は楕円形に近い。

59　石造品　　水輪

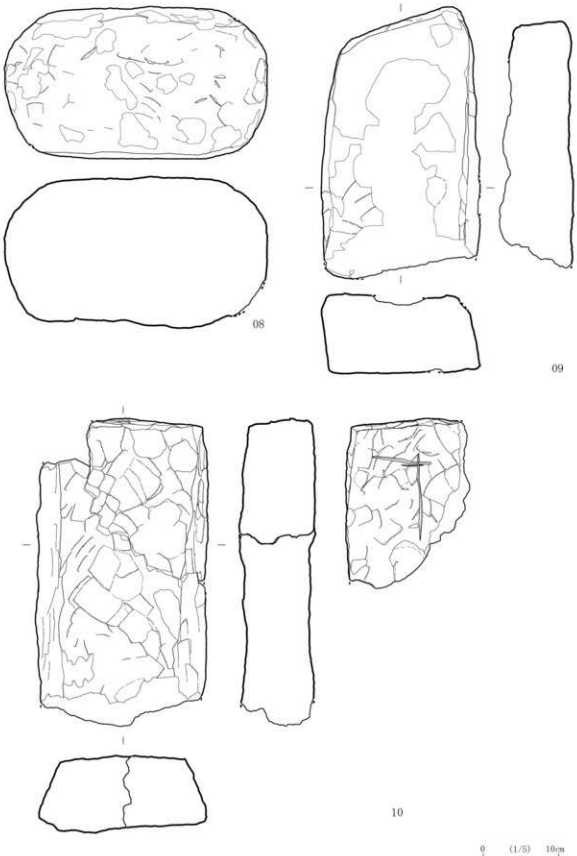
調査区から出土した。石材は凝灰岩である。側面形は横方向に長く、上部中央は僅かに窪む。下面の一部を欠き、剥落部分以外には加工痕が残る。

60　石造品　　基壇部材

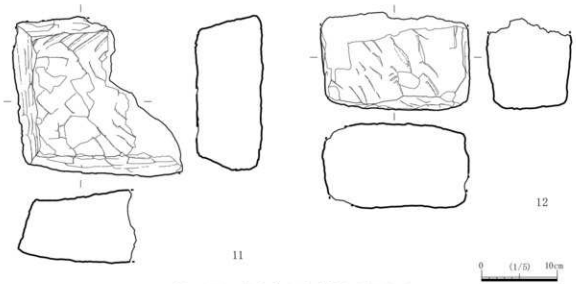
調査区から出土した。石材は凝灰岩である。平面、断面ともに長方形である。両端部を欠損し裏面は特に剥落が著しい。



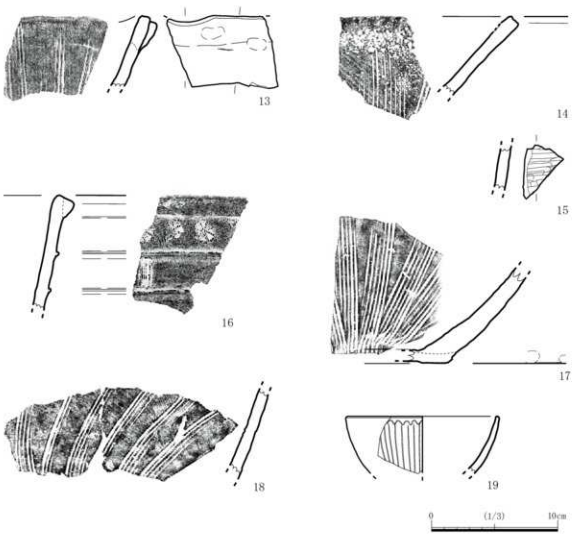
第 15 図　土坑内出土遺物実測図 (1)



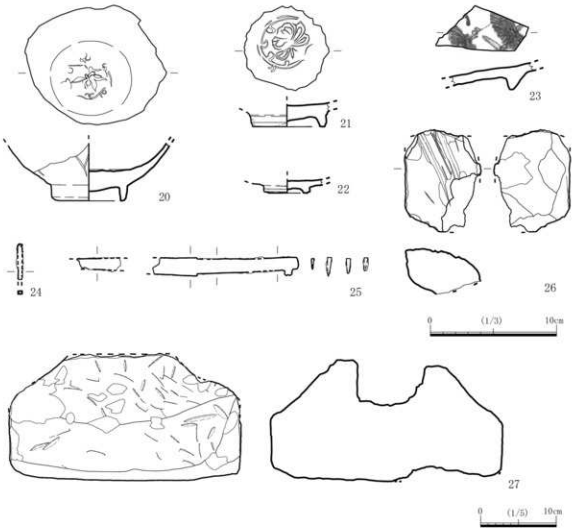
第16図　土坑内出土遺物実測図 (2)



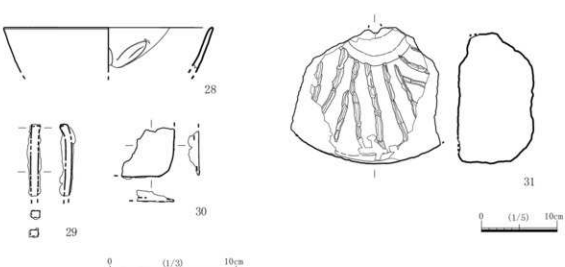
第 17 図　土坑内出土遺物実測図 (3)



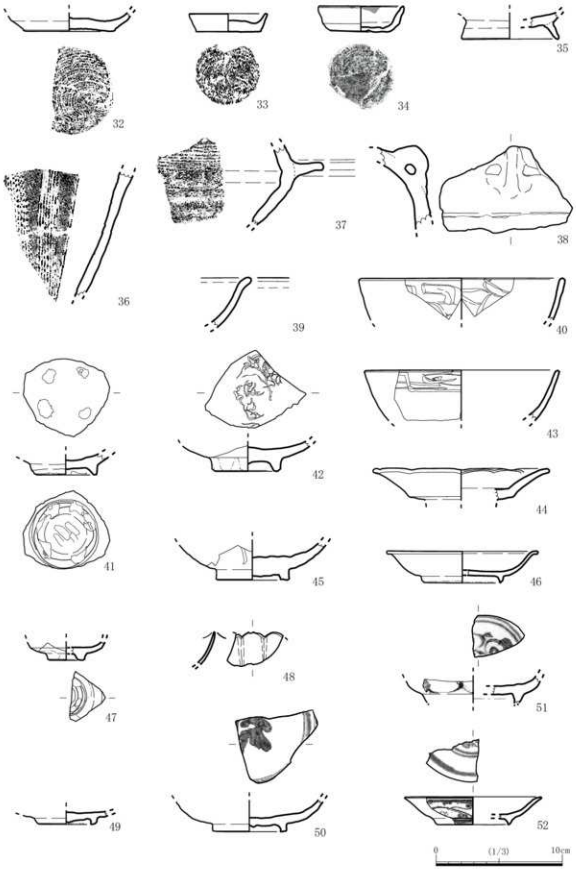
第 18 図　溝内出土遺物実測図 (1)



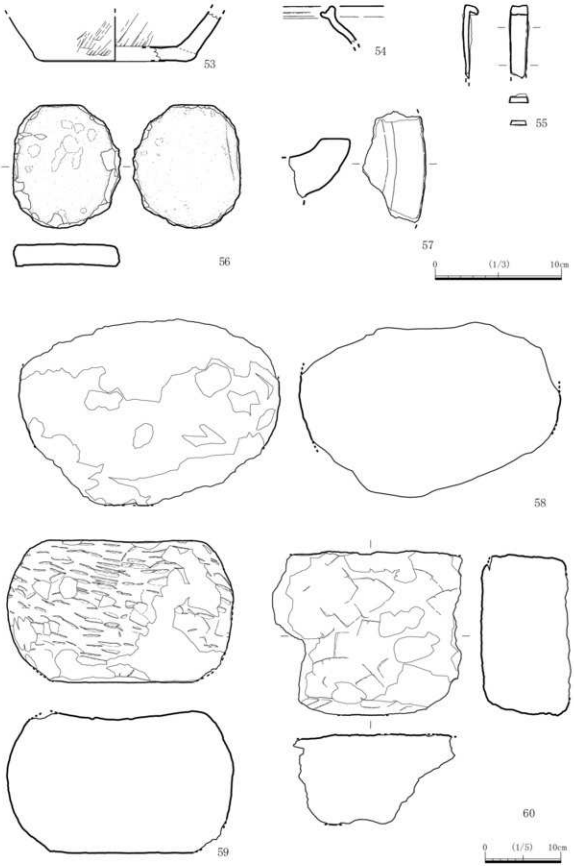
第 19 図　溝内出土遺物実測図 (2)



第 20 図　ピット群出土遺物実測図



第21図　遺構外出土遺物実測図 (1)



第 22 図　遺構外出土遺物実測図 (2)

第２表　出土土器観察表

図版番号	遺物番号	出土地点 グリッド	出土地点 遺構	器種	器形	残存度	法量 口径(cm) 底径(cm) 器高(cm)	色調	胎土	焼成	備考
								外面 / 内面	外面 / 内面		
13	01		SK 04	瓦質土器	すり鉢	口縁1/4 底部1/3	(30.4) (14.0) 12.6	灰（N4/） 褐灰（N3/）	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・指頭圧痕 ハケメ・スリメ	砂粒・褐色粒・白色粒・石英	良
13	02		SK 11	瓦質土器	すり鉢	底部～胴部	8.4+	褐灰（10YR6/1） 灰（7.5Y6/1）	ヨコナデ・ナデ・指頭圧痕 スリメ	砂粒	良
14	13		SD 01	瓦質土器	すり鉢	破片	5.5+	灰（N5/） 灰（N6/）	ヨコナデ・ナデ・指頭圧痕 ナデ・スリメ	砂粒・白色粒・長石	良	片口
14	14		SD 01	瓦質土器	すり鉢	破片	7.7+	灰黄褐（10YR5/2） 褐灰（10YR6/1）	ヨコナデ・ナデ ヨコナデ・ハケメ・スリメ	砂粒・小石粒・石英・雲母	良	受熱痕有
14	15		SD 01	瓦質土器	不明	破片	3.6+	灰（7.5Y5/1） 褐灰（10YR5/1）	ミガキ ナデ	砂粒・小石粒・白色粒角閃石・雲母	良	
14	16		SD 02	瓦質土器	火鉢	口縁1/8	8.8+	黒（10YR1.7/1） 黒褐（10YR3/1）	ヨコナデ ヨコナデ・工具ナデ	砂粒・褐色粒	良	印文
14	17		SD 10	瓦質土器	すり鉢	底部～体部破片	2.6+	灰（7.5Y5/1） 灰（7.5Y5/1）	ナデ・指頭圧痕 スリメ	砂粒・小石粒・長石	良	
15	18		SD 01	陶質土器	すり鉢	破片	7.2+	にぶい黄橙（10YR6/3） 明赤褐（5YR5/6）	ナデ 工具ナデ・スリメ	砂粒・小石粒・石英・雲母・角閃石・白色粒	良	
16	32	Ⅱ－e	土師器	皿	底部2/3	(7.0) 1.5+	黄褐（10YR5/6） 明褐（7.5YR5/6）	回転ナデ・回転糸切 回転ナデ・ナデ	砂粒・赤褐色粒・雲母	良	
16	33	Ⅱ－d	土師器	小皿	口縁1/2 底部完存	6.2 5.1 1.5	橙（5YR7/6） 橙（5YR7/6）	回転ナデ・回転糸切 ナデ・回転ナデ	砂粒・石英・雲母	良	板状圧痕有
16	34	Ⅲ－a・b	土師器	小坏	口縁3/5 底部7/8	6.9 4.8 2.1	にぶい橙（5YR7/4） 橙（2.5YR6/6）	回転ナデ・回転糸切 ナデ・回転ナデ	砂粒	良	板状圧痕有 スス付着 灯明皿
16	35	Ⅲ－a・b	土師器	椀	高台1/2 底部1/2	7.8 2.1+	浅黄橙（10YR8/3） にぶい黄橙（10YR7/3）	回転ナデ ナデ・回転ナデ	砂粒・茶褐色粒	良	
16	36	Ⅱ－e	瓦質土器	すり鉢	破片	9.8+	褐灰（10YR6/1） 灰（N4/）	ナデ・指頭圧痕 ナデ・スリメ	長石	良	
16	37	Ⅲ－a・b	土師質土器	羽釜	破片	6.3+	にぶい黄橙（10YR7/3） 灰黄（2.5Y7/2・6/2）	回転ナデ・ヨコナデ ハケメ・ナデ	砂粒	良	スス付着 鍔付
17	38	Ⅱ－e	土師質土器	壺	胴部破片	3.9+	にぶい黄橙（10YR6/4） にぶい黄橙（10YR6/4）	ナデ ヨコナデ	砂粒・小石粒・石英	良	耳付
18	53	Ⅱ－e	陶質土器	鉢	鉢	(12.0) 4.0+	褐（7.5YR4/6） にぶい黄橙（10YR6/4）	ナデ・ハケメ・ヨコナデ ハケメ・ナデ	砂粒・石英	良	

※　()は復元値、+は残存値

第３表　出土陶磁器観察表

図版番号	遺物番号	出土地点 グリッド	出土地点 遺構	器種	器形	残存度	出土量	口径（cm） 底径（cm） 器高（cm）	色調	胎土 釉	調整	外面 内面	備考
13	03		SX 07・08	青磁	碗	底部完存		6.0 2.1+		オイスター（5Y7.5/1.0） モスグリーン（3GY3.5/3.5）		施釉 施釉	
15	19		SD 02	青磁	碗	口縁1/10		(12.0) 4.5+		鳥の子（5Y9.0/2.0） ミストグリーン（3GY3.5/5.0）		施釉 施釉	貫入有
15	20		SD 10	青磁	碗	底部完存		5.4 4.6+		パールホワイト（N8.5） モスグリーン（3GY3.5/5.5）		施釉 施釉	貫入有
15	21		SD 10	青磁	碗	底部完存		5.7 1.9+		サロー（5Y7.5/2.0） ミストグリーン（3GY7.5/2.0）		施釉 施釉	貫入有
15	22		SD 05	白磁	皿	底部完存		5.7 1.1+		アイボリホワイト（5Y9.0/1.0） リリーホワイト（3G9.0/1.0）		施釉 施釉	細かな貫入有
15	23		SD 05	染付	皿	底部破片				オイスター（5Y7.5/1.0） リリーホワイト（3G8.0/1.0）		施釉 施釉	貫入有 釉に厚み有
16	28	Ⅲ－b	ピット群	青磁	碗	口縁1/10		(16.6) 3.6+		オイスター（5Y7.5/1.0） ブロンズ（5Y4.0/5.5）		施釉 施釉	外面わずかに貫入有
17	39	Ⅱ－e		青磁	碗	口縁一部		4.5+		サロー（5Y7.5/2.0） 浦色（5Y7.5/2.0）		施釉 施釉	細かな貫入有
17	40	Ⅱ－e		青磁	碗	口縁1/8		(16.3) 3.3+		サロー（5Y7.5/2.0） ミストグリーン（3GY7.5/2.0）		施釉 施釉	
17	41	Ⅱ－e		青磁	碗	底部完存		4.9 1.65+		パールホワイト（N8.5） 白緑（3G8.5/2.0）		施釉 施釉	目跡有 貫入有
17	42	Ⅱ－e		青磁	碗	底部完存		4.8 2.4+		灰汁（5Y5.0/1.0） ミストグリーン（3GY7.5/2.0）		施釉・ケズリ 施釉	貫入有
17	43	Ⅲ－a・b		青磁	碗	口縁1/8		(7.4) 4.0+		シルバーグレイ（N7.5） ろくしょう（3G5.0/5.0）		施釉 施釉	大きな貫入有
17	44	Ⅲ－a・b		青磁	皿	口縁1/5 体部屈曲部1/4		(14.0) 2.5+		サロー（5Y7.5/2.0） ミストグリーン（5GY7.5/2.0）		施釉 施釉	輪花
17	45	Ⅲ－a・b		青磁	碗	底部1/2		(5.8) 2.9+		ゴールデンコーン（8YR5.5/6.5） 浦色（5Y7.5/2.0）		施釉 施釉	釉は薄く、貫入有
17	46	Ⅱ－e		白磁	皿	口縁1/6 底部1/4		(12.0) (6.0) 2.5		スノウホワイト（N9.5） パールホワイト（N8.5）		施釉 施釉	
17	47	Ⅱ－e		白磁	小杯	底部1/3		(2.9) 1.5+		スノウホワイト（N9.5） アイボリホワイト（5Y9.0/1.0）		施釉 施釉	目跡有
17	48	Ⅲ－c		白磁	碗	口縁破片		2.7+		アイボリホワイト（5Y9.0/1.0） スノウホワイト（N9.5）		施釉 施釉	
17	49	表土		白磁	皿	底部1/2		4.7 1.0+		アイボリホワイト（5Y9.0/1.0） リリーホワイト（3G9.0/1.0）		施釉 施釉	
18	50	表土		染付	皿	底部1/4		(5.8) 2.5+		アイボリホワイト（5Y9.0/1.0） 藍白（5B8.5/2.0）		施釉 施釉	釉の粘性強く、厚みにムラ有 外面一部無釉部分有
18	51	Ⅲ－c		染付	皿	内径1/6		(16.8) (5.9) 2.1+		シルバーグレイ（N7.5） フロスティグレイ（3G7.5/1.0）		施釉 施釉	釉に粘性有 外面高台部に釉切れ部分有。
18	52	Ⅲ－b		染付	皿	口縁1/8 底部1/12				スノウホワイト（N9.5） 藍白（5B8.5/2.0）		施釉 施釉	
18	54	Ⅱ－b		陶器	急須	口縁一部		2.9+		サロー（5Y7.5/2.0） コーヒーブラウン（8YR3.5/6.0） 墨（N1.5）		施釉 施釉	

＊（）は復元値、＋は残存値

第４表　出土鉄製品観察表

図版番号	遺物番号	出土地点		器種	法量				備考
		ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
13	05		SK 08	鎌	15.7+	4.4	0.4	47.1	
15	24		SD 01	釘	2.8+	0.65+	0.46+	1.4	用途不明
15	25		SD 01	刀子	11.6+	1.5	0.4	15.7	
16	29	Ⅱ－d	ﾋﾟｯﾄ群	釘	5.75+	1.3	0.9	13.8	
16	30	Ⅲ－c	ﾋﾟｯﾄ群	不明	4.2+	4.1+	0.94+	24	
18	55	Ⅲ－c		鋲	5.7+	1.6	1.3	16.8	

※　＋は残存値

第５表　出土石製品・石造品観察表

図版番号	遺物番号	出土地点		器種	残存度	石材	法量				備考
		ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
13	04		SK 11	温石	不明	滑石	8.3+	7.4+	1.7+	98.8	石鍋転用品 穿孔有
13	06		SK 10	石臼	1/4	輝石安山岩	16.8	17.0+	9.1+	3.5	
13	07		SK 11	石臼	1/10	角閃石安山岩	11.8+	19.2+	10.2+	2.3	
14	08		SK 11	水輪	概ね完形	凝灰岩	35.8	34.8	20.2	18.8	
14	09		SK 11	基壇部材	4/5	凝灰岩	36.0+	21.0	11.1	6.0	
14	10		SK 11	基壇部材	2/3	凝灰岩	43.7+	22.8+	10.8+	6.6	舟底線刻有
14	11		SK 11	基壇部材	1/2	凝灰岩	22.4	21.2	10.0	2.4	
14	12		SK 11	基壇部材	1/3	凝灰岩	12.9+	19.8+	11.5+	3.4	
15	26		SD 01	不明	2/3	凝灰岩	8.1+	6.1	3.8+	107.9	
15	27		SD 04	火輪	概ね完形	凝灰岩	31.6+	30.7+	16.7	11.8	
16	31	Ⅳ－b	ﾋﾟｯﾄ群	石臼	1/5	輝石安山岩	18.0	19.8	10.2+	5.0	
18	56	表土		円盤状加工品	完形	砂岩	9.8	8.6	1.8	254.0	
18	57	表土		茶臼	破片	角閃石安山岩	8.8+	4.95+	4.7+	171.5	
18	58			水輪	2/3	凝灰岩	35.7	34.5	24.6+	17.2	
18	59			水輪	8/9	凝灰岩	30.6	29.9	18.9	12.9	
18	60			基壇部材	1/2	凝灰岩	25.1+	21.7+	12.1+	4.8	

※　＋は残存値

第Ⅳ章　まとめ

今回の発掘調査は社会福祉事業関係保育園建設に伴うもので、建設用地全体の状況は以前に実施された「国道３号北バイパス建設」に伴う発掘調査、及び、先んじて行われた確認調査によって「中世の居館の可能性がある」と認識され、遺跡、遺構に影響が及ぶ園舎建設予定地が発掘調査の対象地であった。発掘調査の結果についてまとめてみれば、５条の溝遺構は確認調査等により想定されていた「中世の居館」の周囲を廻らす溝とは位置関係や規模に差異があることなどから直接的な関係はないようである。

今回の発掘調査域は今までの調査で検出確認されていた南側の「中世の居館」で廻らす溝の北外域であろうことを示し、この域での居住域や墓域等との何らかの住み分けを呈するものとみられる。そして、SD02、SD04 の近くに出土した集石遺構には五輪塔の部位が集石の中に、遺棄された状態で出土している。墓所の改設等に伴い遺棄されたのかと推察され、近くに中世等に墓所、墓域が営まれたことの証しともされようか。一方、SD05 の区画がみられる外側は小規模の建物が形成されていた可能性がもたれる。そして、調査地のほぼ中央部に SK01 ～ 10 の土坑が南北に並んだが、対をなした４基の大型方形の土坑に集約できよう。SK10 を例えとしてみると長さ 3.14 m×幅 2.59 ×深さ 1.23 m を測るなど規模の大きいものであることを示している。底部まで深いため、それぞれに西側からの階段状の設けが施されていたものであろう。埋土からは青磁片、すり鉢片、鉄器片、焼土、カーボン等の出土があるので中世から近世の土壙もしくは地下式土壙の可能性が高い。

数多くのピット群も検出されたが掘立柱建物や構築物を構成するような規格的な並びは見いだせない。SK06 や SD02 の周辺のやや大型のピット群については土坑として、Ⅱ－d、Ⅳ－c グリッドのピット群はイモ穴等の農耕によるともみられるが、大半の先細りとなるものは樹根痕とされようか。

出土遺物は表土から出土したものも含め 60 点を報告している。最も数が多かったすり鉢は瓦質のものがほとんどであるが一部の陶質のものが見られた。埋葬のために壺等の代用として再利用されたものも含まっていよう。その他に土師器、土師質土器は皿、小杯、碗、羽釜、壺を認めた。皿、小杯、碗の底部には特徴的な回転糸切痕を示し、一部口縁部に煤を付着したものは灯明皿の用途を示している。羽釜、壺にはそれぞれ鍔、耳部の貼り付けがあるものなどが報告できた。青磁、白磁は碗と皿の底部片そして小片に限られるが、外面の連続連弁文や見込み部に花文のヘラが施したものがある。施釉は全体的に薄い。竜泉窯産等の請来品であろう。染付は皿片であり、見込みに松文や花文、唐草文がある。鉄製品は小片であるが、釘、刀子、鎹、鎌の一部であろう。

石製品には石臼、茶臼の破片や滑石製の石鍋片が出土している。石造品は凝灰岩製の五輪塔で火輪と水輪が確認された。基壇部材は五輪塔と同じく凝灰岩の切石で加工痕が顕著なものもある。

以上のような遺構、遺物の出土状況は今回の調査地が全体的に想定された「中世の居館」を裏付けるものではなく、時期的なものは同一とするものの居住域とは異なる場所にあたると考えた。遺跡の性格を顕著に示すものとしては、４基の方形土坑が挙げられる。この土坑群は、それぞれに西側中央部に階段状の施設をもち、深く規模の大きなものである。そして、輸入陶磁器など高いレベルの出土品などもあり、この地域の有力者によって墓域として長く営まれてきたところであろうことが推し量られる。調査整理の段階に至っての検討では、この地域において数例の確認しかないが、「地下式土壙」との関係も今後、討議されうるものであろうことが確認された。

今回の調査地の調査前の状況は開田された水田耕作地であったが近接地に現代の墓地も存在している。近くに寺院があったとも伝えられる。そして東南側の千人墓の石碑の存在からも一帯が墓地、墓

域として続き、近現代になって西側からの本格的な農耕生産地とされ現在に至ってきたものと判断されよう。

図　版

図版 1

発掘調査前状況（南側から）

発掘調査状況（熊本北バイパスから）

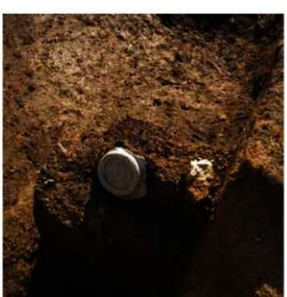
図版 2

調査区中央部調査状況（南側から）

調査区中央部調査状況（南側から）

SD01 検出状況

P-1 鉄器、土器出土状況



青磁底部出土状況

図版 4

SD02 及び南側断面

SD05 検出状況（北側から）

集石遺構 A 出土状況

集石遺構 B 出土状況

図版 6

SD02 集石遺構完掘（南側から）

SK01 ～ 10 調査状況（南側から）

SK01・02 完掘（東側から）

SK04・05 完掘（東側から）

図版 8

SK01 ～ 03 完掘（西側から）

SK04・05 完掘（西側から）

SK07・08（東側から）

SK07・08（南側から）

図版 10

SK08 鉄器出土状況

SK10 完掘（東側から）

SK10（西側から）

SK10（北側から）

図版 12

発掘調査指導、検討会

作業風景

土坑内出土遺物（1）

図版 14

08

09

10

11

12

土坑内出土遺物（2）

13

14

15

17

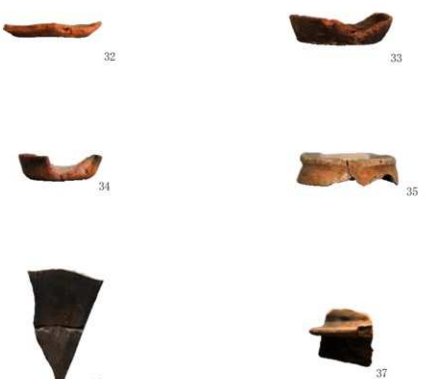
16

溝内出土遺物（1）

溝内出土遺物（2）

図版 16

ピット群出土遺物



遺構外出土遺物（1）

38

39

40

41

42

43

45

44

46

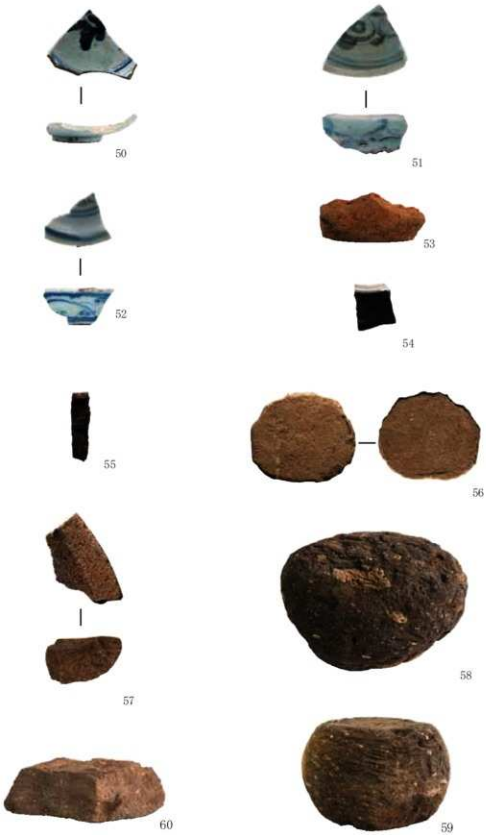
47

48

49

遺構外出土遺物（2）

図版 18



遺構外出土遺物（3）

船入遺跡確認調査

船入遺跡確認調査所見

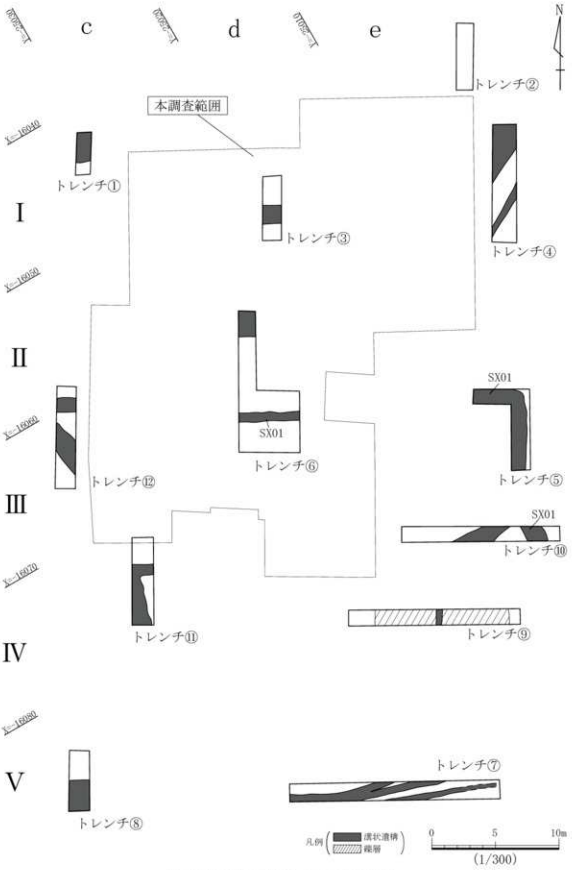
調査日：平成 28 年 8 月 26 日～ 30 日

開発予定地内にトレンチ 12 本を設置した。調査区北東端のトレンチ②のみ遺構、遺物が確認されず、その他のトレンチからは何らかの遺構、遺物が確認された。

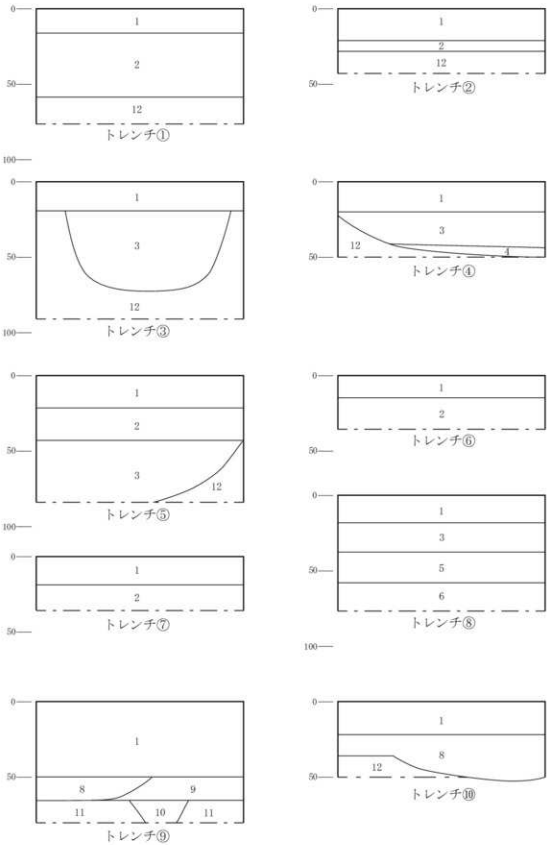
このうち、トレンチ⑤⑥⑪で検出された溝状遺構（SX01）は、前回調査時に検出された居館の堀跡の東・北側の一部である可能性がある。その他のトレンチでは溝状遺構が検出されている。遺構の性格は不明であるが、居館の敷地内であると想定すると館に関連した遺構である可能性が考えられる。トレンチ⑪からはピットが検出されているが、これも遺構としてとらえるかどうかは不明である。またトレンチ⑨では広範囲に礫層がみとめられ、居館内だと想定した場合何らかの施設が存在したことも考えられる。

全体として現地表面から 15 ～ 20 ㎝程度の厚さの耕作土、床土があり、その下は硬くしまり、橙色粒、1 ～ 5 ㎝程度の小礫を多く含む暗灰茶褐色土層がみとめられる。この層は遺物包含層と考えられるが、自然堆積かどうかは不明であり、遺構内埋土と区別がつけにくい。また場所によっては存在しないことから、一帯が後世に大規模な削平を受けていることが推測される。

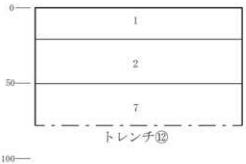
遺物としては、磁器、須恵器、すり鉢、火鉢が出土している。また軒丸瓦や石臼、砥石も出土している。今回の確認調査によって、出土遺物が中近世のものと考えられること、前回船入遺跡の発掘調査により判明した堀跡のつづきと思われる溝状遺構が検出されたことから、中世の居館の可能性がある。



船入遺跡確認調査トレンチ配置図



船入遺跡確認調査トレンチ土層断面概略図（1）



土層注記

1層　耕作土・床土
2層　暗灰茶褐色土（固くしまり、橙色粒、1～5mm大の小礫を多く含む。包含層と考えられる。）
3層　暗灰茶褐色土（固くしまり、橙色粒、1～5mm大の小礫を多く含む。）
4層　暗灰茶褐色土（固くしまり、橙色粒、1～5mm大の小礫、20～30mm大の円礫を多く含む。）
5層　暗褐色土（固くしまり、橙色粒、1～5mm大の小礫を多く含む。）
6層　灰褐色土（しまらない。）
7層　暗茶灰褐色土（固くしまり、橙色粒、1～5mm大の小礫を多く含む。硬化面が認められる。）
8層　暗褐色土（固くしまり、赤褐色土が層状に交じる。1～5mm大の小礫を多く含む。）
9層　暗褐色土（固くしまる。1～5mm大の礫を多く含む。）
10層　暗褐色土（9層よりも暗い。固くしまる。1～5mm大の礫を多く含む。）
11層　暗褐色土（固くしまる。1～5mm大の礫層。）
12層　明黄色粘質土（ローム）

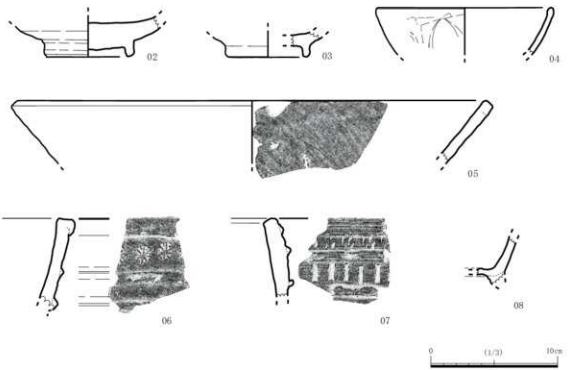
確認調査トレンチ一覧表

トレンチ番号	備考
トレンチ①	南から北に向かって1層が傾斜するが、遺構か自然なものかは不明。1層より縄器が出土した。
トレンチ②	非常にあさく、包含層はほとんど残っていなかった。
トレンチ③	溝状遺構が検出された。ローム面で検出されたが、埋土は包含層と見分けがつかない。
トレンチ④	溝状遺構が検出された。ローム面で検出されたが、埋土は包含層と見分けがつかない。礫石、須恵器等が出土した。
トレンチ⑤	溝状遺構が検出された。前回調査時の居館の堀のつづきの可能性がある。石臼、軒丸瓦が出土した。
トレンチ⑥	溝状遺構がローム面で検出された。埋土は包含層と見分けがつかない。トレンチ⑤の堀のつづきの可能性がある。
トレンチ⑦	溝状遺構が数条、ローム面で検出された。埋土は包含層と見分けがつかない。縄器、擂鉢、火鉢等が出土した。
トレンチ⑧	溝状遺構が検出された。埋土は包含層と見分けがつかない。縄器等が出土した。
トレンチ⑨	トレンチ⑥でのみ、礫層が検出された。1～5cm程度の礫で、広範囲にわたって敷き詰められているようであった。
トレンチ⑩	溝状遺構が検出された。前回調査時の居館の堀のつづきの可能性がある。
トレンチ⑪	溝状遺構がローム面で検出された。またピット2基が検出された。
トレンチ⑫	溝状遺構が検出された。前回調査時の居館の堀のつづきの可能性がある。また硬化面のある溝状遺構も検出された。道路の可能性がある。

船入遺跡確認調査トレンチ土層断面概略図（2）

【トレンチ④】

【トレンチ⑦】



確認調査トレンチ出土遺物実測図

確認調査出土遺物観察表

遺物番号	出土地点 トレンチ	器種	器形	残存度	法量（cm） 口径	底径	器高	色調 外面／釉上	内面／釉	調整 外面	内面	備考
01	④	青磁	碗	体部 1/4	(6.0)		2.8+	パールホワイト (N8.5)	モスグリーン (3GY5.5/5.5)	施釉	施釉	
02	⑦	青磁	壺	底部 完存		7.1	3.3+	キャメル (4YR5.5/6.5)	モスグリーン (3GY5.5/5.5)	施釉・削り出し高台	施釉・釉ハギ	
03	⑦	青磁	壺	高台 1/3		(6.8)	2.1+	オイスター (5Y7.5/1.0)	ミストグリーン (3GY7.5/2.0)	施釉・削り出し高台	施釉	細かな貫入有
04	⑦	青磁	壺	口縁 1/8	(14.0)		3.7+	シルバーグレイ (N7.5)	モスグリーン (3GY5.5/5.5)	施釉	施釉	貫入有
05	⑦	瓦質土器	すり鉢	口縁 1/10	(38.0)		5.0+	黄灰 (2.5Y5/1)	灰 (N5/)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・工具ナデ・スリメ	細かな貫入有
06	⑦	土師質土器	鉢	口縁 破片			7.2+	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	ナデ・ヨコナデ	ナデ	印文
07	⑦	瓦質土器	鉢	口縁 破片			6.3+	灰 (5Y4/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ハケメ	印文
08	⑦	土師質土器	鉢	底部 破片			3.8+	にぶい橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	

※ （）は復元値、＋は残存値

確認調査前状況

トレンチ① 南北断面（東→西）

トレンチ② 南北断面（東→西）

トレンチ③ 溝状遺構検出状況（北→南）

トレンチ④ 溝状遺構検出状況（北→南）

トレンチ⑤ 溝状遺構検出状況（北→南）

トレンチ⑥ 溝状遺構検出状況（北→南）

トレンチ⑦ 溝状遺構検出状況（北→南）

船入遺跡確認調査状況写真 (1)（平成 28 年 8 月 26 日～ 30 日）

トレンチ⑦ 溝状遺構検出状況（西→東）

トレンチ⑦ 溝状遺構内礫、土器出土状況

トレンチ⑧ 南北断面（東→西）

トレンチ⑨ 礫層、溝状遺構検出状況（北東→南西）

トレンチ⑩ 溝状遺構検出状況（南東→北西）

トレンチ⑪ 溝状遺構検出状況（北→南）

トレンチ⑫ 溝状遺構検出状況（北→南）

船入遺跡確認調査状況写真 (2)（平成 28 年 8 月 26 日～ 30 日）

船入遺跡確認調査出土遺物

報告書抄録

フリガナ	フナイリイセキ
書名	船入遺跡
副書名	社会福祉法人百合ケ丘保育園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　次	
シリーズ名	合志市文化財調査報告第3集
編著者名	菅 真一郎　　米村 大　　江本 直
編集機関	合志市教育委員会
所在地	合志市御代志1661番地16
発行年月日	2018年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
船入遺跡	合志市須屋字塔ノ木	405	96	32°51′15″	130°43′57″	2017 10.28 ～ 12.19	800㎡	社会福祉法人百合ケ丘保育園建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船入遺跡	墓城	中世 近世	土坑 溝	土師質土器 瓦質土器 輸入陶磁器 鉄製品	

合志市文化財調査報告　第3集

船入遺跡

社会福祉施設百合ケ丘保育園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行年月日　2018年3月31日

編集・発行　合志市教育委員会
〒861－1104　合志市御代志1661番地16

印刷・製本　社会福祉法人　山紫会
就労支援事業所　白鳩園
〒861－1104　合志市御代志772番地1